宮城県文化財調査報告書第58集

宮城県ほ場整備関連

遺跡詳細分布調査報告書

(昭和53年度)

昭和54年4月

宮 城 県 教 育 委 員 会

宮城県ほ場整備関連

遺跡詳細分布調査報告書

序

本報告書は，農業基盤整備事業関連の６遺跡について，宮城県教育委員会が昭和53年度の国庫補助事業として実施した遺跡詳細分布調査の結果をとりまとめたものであります。

最近の種々の開発事業に伴って，埋蔵文化財の調査は年ごとに急激な増加を示しており，なかでも農業基盤整備事業に関係する遺跡の調査が目だっています。したがって，農業基盤整備事業と埋蔵文化財の保存のための調整は，ますます重要な課題になってくるものと考えられます。

本書に収めた６遺跡の調査成果は，豊かな自然と悠久の歴史のなかでわれわれの祖先が創造し守り育ててきた貴重な文化遺産の現況でありますが，幸い多くの関係者の文化財に対する理解と協力が得られ，ほ場整備にあたって工法変更による遺跡保存の措置が大幅に取り入れられましたことは，まことに喜ばしい限りであります。

本書を刊行するに当たり，御尽力と御理解をいただきました関係各位に対しまして深甚なる敬意と感謝を申しあげる次第であります。

昭 和 54年 3月

宮城県教育委員会
教 育 長 北 村 潮

目　　次

序
Ⅰ　はじめに……1
Ⅱ　中平遺跡……3
Ⅲ　宮古島貝塚群……7
Ⅳ　色麻古墳群……13
Ⅴ　玉造遺跡……29
Ⅵ　宇南遺跡……49
Ⅶ　鶴ノ丸遺跡……53

例　　言

１．本書はほ場整備事業に関連する６遺跡の調査報告書である。
２．調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当し，関係各市町村教育委員会の御協力をいただいた。
３．本書の作成に際し，東北学院大学教授伊東信雄氏には資料を提供していただき，東北歴史資料館，宮城県多賀城跡調査研究所には御教示，御協力をいただいた。
４．石器の材質鑑定は東北大学教養部地学科助教授蟹沢聡史氏にお願いした。
５．本書における土色は「新版標準土色帳」（小山・竹原：1987）、土性は国際土壌学会の粒径区分によるものである。
６．玉造遺跡の第１図は建設省国土地理院長の承認を得て，同院発刊の25,000分の１地形図を複製したものである。（承認番号昭54東複第　号）
７．執筆編集は文化財保護課が行なった。各遺跡の担当者は次の通りである。

中平遺跡	太　田　昭　夫
宮戸島遺跡	加　藤　道　男
色麻古墳群	阿　部　　恵
玉造遺跡	小　川　淳　一
宇南遺跡 鶴ノ丸遺跡	斉　藤　吉　弘

Ⅰ．はじめに

宮城県教育委員会は国庫補助事業を得て行なう遺跡詳細分布調査として昭和53年度には以下の６遺跡の調査を実施した。これらの調査は、県営および団体営ほ場整備事業等に係る遺跡を対象とし、当該事業を計画した関係機関との間で、遺跡保存のための実施計画変更等の協議を行なうために必要な資料の収集を目的としたものである。

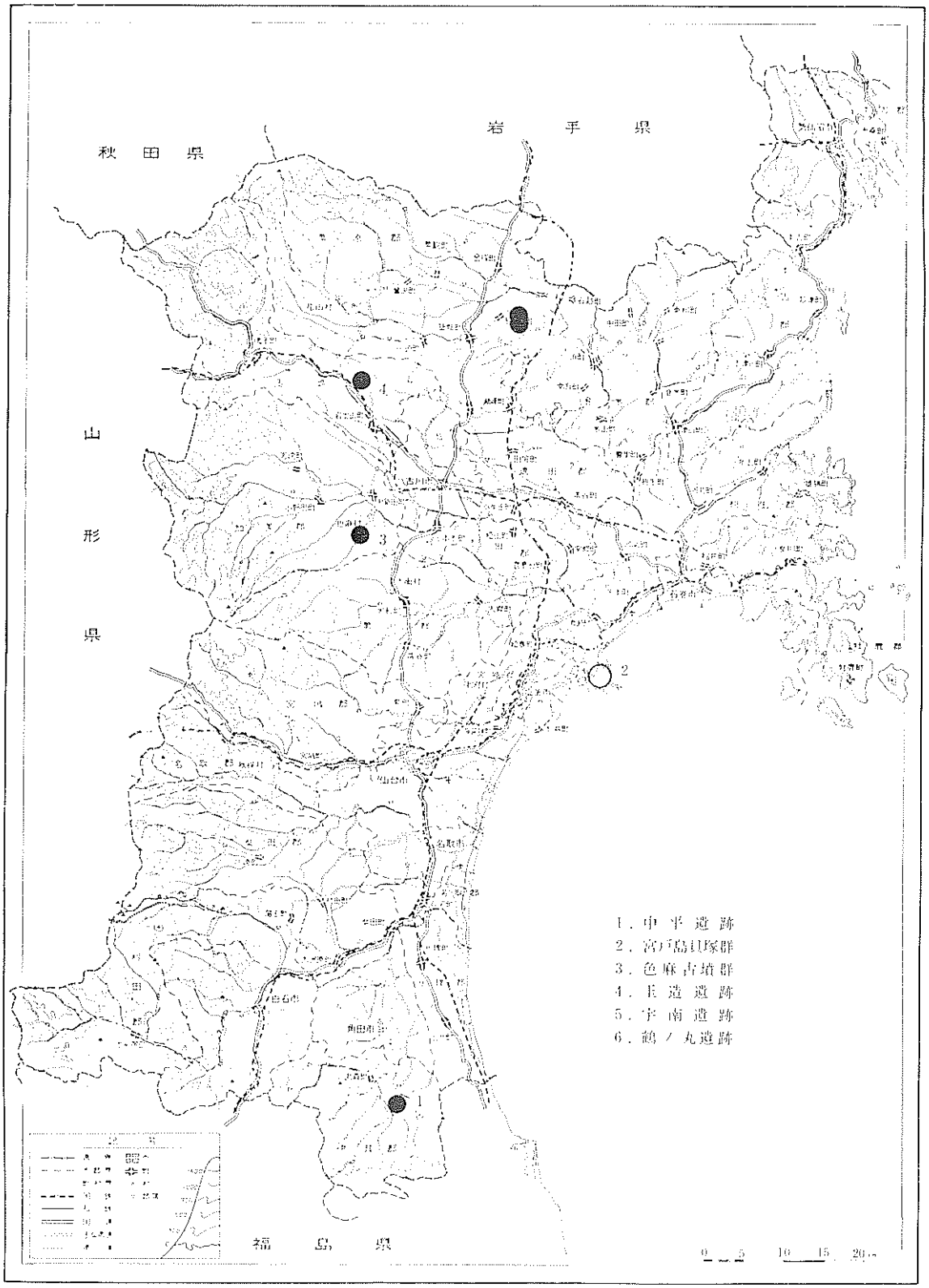
中平遺跡は宮城県伊具郡丸森町中平に所在する。宮城県農政部が計画した丸森町大内地区の県営ほ場整備事業（299*ha*）は昭和52～58年度（予定）に面工事が実施されるものであり、県教委の分布調査の結果11ヶ所の遺跡がかかわり合いをもつことが確認されている。中平遺跡はそのなかの１つで、遺跡周辺の面工事は昭和53年度であるため農政部との協議により遺構確認調査を行なうことになった。

宮戸島貝塚群は桃生郡鳴瀬町宮戸にある。鳴瀬町は農村基盤総合整備事業を計画し、昭和54年より事業に着工することになった。この事業には83*ha*のほ場整備事業をはじめとして農道、集落排水路、公園整備等も含まれており、宮戸島貝塚郡との大きなかかわり合いが予想された。そのため関係者間で協議のうえ、島内の分布調査を行なうことになった。

玉造遺跡は玉造郡岩出山町玉造にある。岩出山町二ッ石土地改良区は農地の県営ほ場整備事業を計画し昭和49年度から実施してきているが、54年度以降には119.8*ha*の面工事計画をたてている。県教育委員会と岩出山町教育委員会が行なった遺跡分布調査の結果、昭和54年度面工事予定地内には玉造遺跡がかかわり合うことが確認され、関係者間の協議のうえ範囲確語調査を行なうことになった。

色麻古墳群は加美郡色麻町の花川流域にある。色麻土地改良区は農地の県営ほ場整備事業を計画し、昭和46年度以来工事に着工している。色麻古墳群は四釜Ⅰ期地区の54年度面工事予定地内に含まれており、県教委、色麻町教育委員会が関係機関と協議のうえ分布調査を実施することになった。

宇南遺跡および鶴ノ丸遺跡は栗原郡志波姫町八樟に所在する。両遺跡の一部は東北自動車道の路線敷となり昭和49年から53年までの間に発掘調査が行なわれ、その結果をもとに遺跡の範囲が推定されている。志波姫町では農地の県営ほ場整備事業を計画し、昭和41年度以来着工しているが、昭和53年度に面工事が実施される宇南Ⅰ区内に宇南遺跡が、また中江第１工区内に鶴ノ丸遺跡がかかわり合いをもつため、範囲確認調査を行なうことになった。なお宇南館跡については、範囲確認調査の結果をもとに遺跡保存について関係者間で協議を行なったが、現状保存が困難であると判断された部分については事前調査を行なっている。


秋田県
岩手県
山形県
福島県
1. 中平遺跡
2. 宮戸島貝塚群
3. 色麻古墳群
4. 王造遺跡
5. 宇南遺跡
6. 鶴ノ丸遺跡
0 5 10 15 20km

遺跡位置図

Ⅱ　中　平　遺　跡

調査要項

遺跡所在地：伊具郡丸森町大内字中平

調 査 期 間：昭和53年7月10日～24日、10月17日

調 査 面 積：約15,000㎡

発 掘 面 積：約480㎡

遺 跡 記 号：ＥＺ

遺 跡 番 号：10139

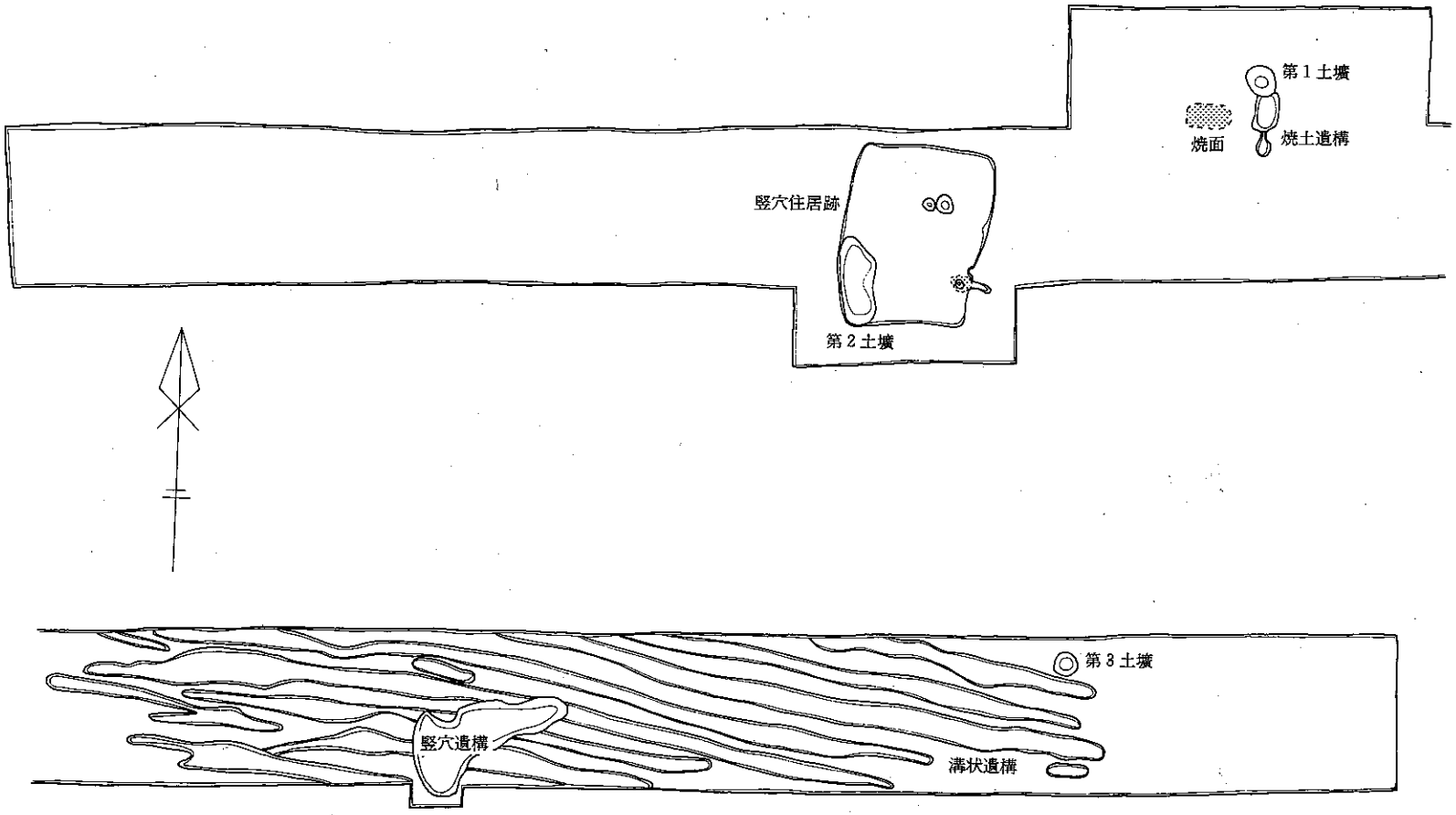
調 査 主 体：宮城県教育委員会

調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：平沢英二郎・高橋　守克

森　　貢喜・太田　昭夫

協 力 機 関：丸森町教育委員会



中平遺跡Ⅰ区遺構配置図

0　5　10m

１．遺跡の立地

中平遺跡は、丸森町の中心部の東南約10㎞に位置している。仙台平野の南部に角田盆地があり、丸森町はその盆地の南端に位置している。丸森町の南部にある阿武隈山地からは、いくつかの小河川が発し、北流し阿武隈川に注いでいる。遺跡は、そのひとつである雉子尾川の自然提防上に立地している。遺跡の標高は約26～27ｍである。遺跡の現状は桑畑・野菜畑・水田である。周辺には縄文時代から中、近世までの遺跡が数多く分布している。

２．調査の概要

本遺跡の調査は、大内地区の県営ほ場整備事業で、遺跡全体がその対象地区に含まれるために行われた範囲確認調査である。調査は、水路の部分を対象として実施した。その面積は、水路となる北側の部分（Ⅰ区）約280㎡、南側の部分（Ⅱ区）約200㎡、計約480㎡である。

その結果、Ⅰ区では地表から約50㎝で遺物包含層（第２層）に達し、地山上面で竪穴住居跡１軒、竪穴遺構１基、焼土遺構１基、土壙３基、溝状遺構などが発見された。Ⅱ区では、遺物包含層（第２層）は発掘区東端に薄く見られただけで、他に遺構、遺物とも発見されなかった。

〈**竪穴住居跡**〉平面形は長軸が4.4ｍ、短軸が3.5ｍの南北に長い長方形である。削平が著しく、残存壁高は３～５㎝である。柱痕跡のあるピットは発見されなかった。周溝は伴わない。カマドは、東壁の南寄りの部分に付設されている。一部残存する側壁は、地山を削り出して構築されている。奥壁から東に煙道がのびるが削平のためその底面しか残存していない。床面中央部に径約40㎝の焼面が認められた。出土遺物から住居跡の年代は平安時代と考えられる。

〈**竪穴遺構**〉平面形は略三角形で、規模は長軸が3.7ｍ、短軸が2.0ｍである。底面は凸凹がある。出土遺物から竪穴遺構の年代は奈良～平安時代と考えられる。その性格については不明である。

〈**焼土遺構**〉平面形は長方形の掘り込みと円形の浅いくぼみから成る。長方形の掘り込みは、長軸が約100㎝、短軸が約60㎝、深さが約30㎝である。底面は焼けてはいないが壁は火熱を受け赤変している。堆積土の第３層上面も火熱を受けており、この面から完形の土師器坏が数点出土している。したがって本遺構は少くとも２回使用されたものと考えられる。円形の浅いくぼみも全体が火熱を受け赤変している。出土遺物からこの焼土遺構の年代は平安時代と考えられる。性格については不明な点が多く、今後の検討課題である。

〈**土壙**〉第１土壙は、平面形は長軸が90㎝、短軸が70㎝の楕円形で、深さは33㎝である。底面から土師器の坏が出土している。また底面よりやや上位で骨片が検出された。この骨片は、東北大学医学部助手百々幸雄氏の鑑定によれば「髄腔面の形状などからみて人骨の可能性が高くさらに石炭化しているようであり焼かれたものと思われる。」とのことである。したがって第１土壙は火葬墓の可能性がある。また出土遺物から第１土壙の年代は平安時代と考えられる。第

２土壙は、平面形は長軸180㎝、短軸70㎝の楕円形に近い。出土遺物から第２土壙の年代は平安時代と考えられる。性格については不明である。第３土壙は、平面形は径約40㎝の円形である。出土遺物がなく、年代・性格とも不明である。

〈**溝状遺構**〉数本発見された。いずれも南東方向に平行して走っている。年代は出土遺物から奈良～平安時代と考えられる。性格は不明である。

３．まとめ

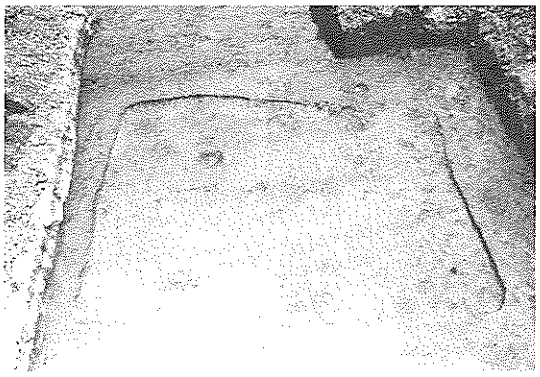
１．中平遺跡は、雉子尾川によって形成された自然堤防上に立地している。

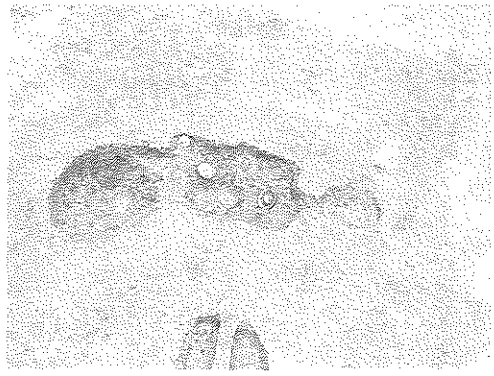
２．今回の調査によって発見された遺構には、竪穴住居跡、竪穴遺構、焼土遺構、土壙、溝状遺構などがある。それらは、ほとんど奈良時代から平安時代にかけてのものである。

３．出土遺物には、土師器、須恵器、赤焼土器、鉄製品がある。それらは奈良時代から平安時代かけてのものである。

４．遺跡の範囲は遺物包含層の分布状況などから約15000㎡におよぶものと推定される。そして今回の調査区以外にも同時代の遺構・遺物の存在が予想される。

（太田昭夫）





上　遺跡近景（南から）　下左　竪穴住居跡（西から）　下右　焼土遺構と第１土坑（西から）

Ⅲ　宮　戸　島　貝　塚　群

調査要項

遺跡所在地：桃生郡鳴瀬町宮戸

調 査 期 間：昭和53年12月5日～9日、54年1月8・12日

調査主体者：宮城県教育委員会

調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：小井川和夫・加藤　道男

丹羽　　茂・森　　貢喜

共同調査者：東北歴史資料館・鳴瀬町教育委員会

宮戸島の分布調査

宮戸島は宮城県桃生郡鳴瀬町の南部にあり、島の面積は約7.97㎢で鳴瀬町全体の約15%を占めている。かつては島であったものが、北上する沿岸流に運ばれた漂砂の堆積による東名砂嘴の発達によって現在は陸つづきとなっている。

島の大半は小起伏丘陵である。標高105mの大高森を中心として標高50m以上の高地が萱野崎から潜ヶ浦西方まで南北に連なり、これからさらに標高30～40mの丘陵が樹枝状にのびている。丘陵端は直接海につき出し、海岸線は複雑に入り組んで切り立った海飾崖が多くみられる。砂浜は里浜・月浜・大浜・室浜などにみられ、また狭い入江の奥にわずかに形成されている。

里浜・室浜などの浜には漁港が作られ、浜に面して集落が形成されている。丘陵上は畑地として利用されている部分もあるがいずれも面積は狭く、多くは杉・松林あるいは雑木林となっている。入江は堤防を築くなどして水田化されているが、近年は休耕して荒地となっているところも多い。

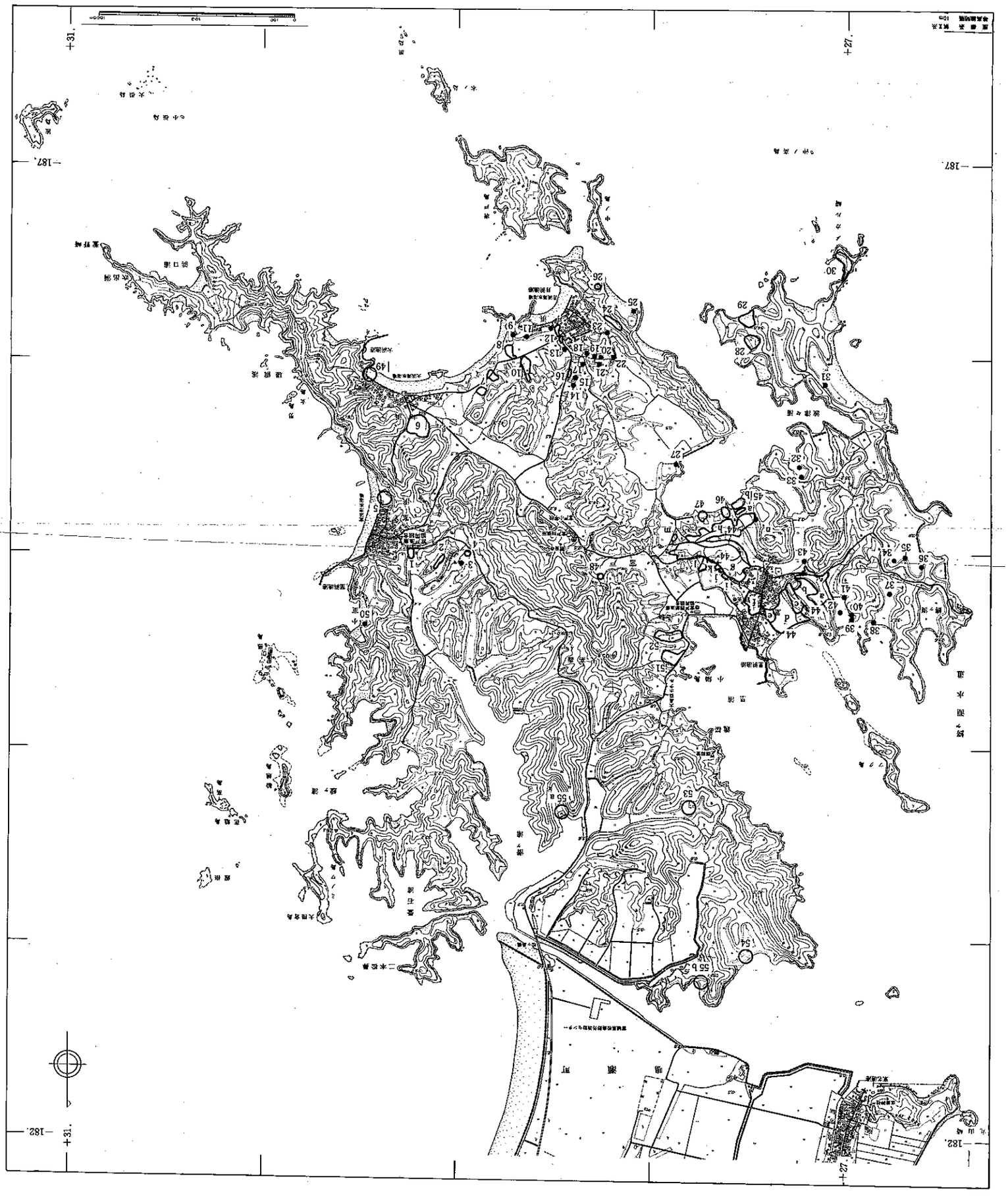
分布調査は昭和53年12月5日～9日、54年1月8・12日の７日間に実施した。当初は潜ヶ浦以南のほぼ全島を対象として行なう予定であったが、島北東部の観音山から先と、南東部の瑳俄渓一帯は、丘陵部の林が深く、また急傾斜地であり、陸づたいでの踏査が困難であったため今回は対象から除外した。

調査の結果、新たに41ヶ所の遺跡が発見され、すでに周和の遺跡として宮城県遺跡地名表に登載されているものと、後藤勝彦氏の御教示によるもの、東北大学生諸氏が確認されているものとを加えると、55遺跡69地点となる。個々の遺跡の調査内容は表に示したが、この中で里浜地区とその周辺の遺跡についてはいずれも接続して遺物の散布が認められ、遺跡ごとにその範囲を限定することが困難であったため、「里浜貝塚」として一括し、従来使用されている遺跡名は地区名として付け加えた。

新たに発見された遺跡の内容をみると、所属時期は古墳時代以降と推定されるものが大半であり、丘陵斜面上に立地する集落跡と考えられるものとともに、入江の砂浜に形成された製塩遺跡の数が多く、また、いずれも面積は狭い。このことは、以前の調査によって特に縄文時代などの大規模な遺跡は多くがすでに発見され、また、調査研究の中心がそれらの遺跡を対象としたものであったことによるものと思われる。

また、今回教多く発見された製塩遺跡の中には、背後に崖あるいは急傾斜地をひかえた地に立地するものがあり、当時、製品の運搬に舟の利用が考えられるので、宮戸島の周囲を取りまく中小の島々についても今後分布調査を行なう必要がある。

なお、遺跡の地点と範囲は、調査時には$\frac{1}{2500}$の地図に記入したが、本書の図版は紙数の関係で$\frac{1}{10000}$の地図に記入しなおしたものを使用して作製している。



宮戸島遺跡分布図

番号	県遺跡地名表番号	遺跡名	内容
1	002	室浜貝塚	縄文時代（前・中・後期）、丘陵鞍部の貝塚で南斜面に貝層が発達
2			谷沿いの斜面、縄文土器が少量散布
3			縄文時代、石匙1点、谷奥のゆるやかな斜面の畑地
4			東北大学生が発見、未確認
5	014	マゴメ浜遺跡	奈良・平安時代、製塩土器、未確認
6			平安時代(?)、広い範囲に製塩土器・須恵器が少量散布、一部に貝殻が散布するが当時のものか疑わしい。
7	003	三サ河遺跡	畑地（砂地）に貝殻が広く散布、土師器・須恵器が少量ある。
8			農協食堂前の畑地、製塩土器・土師器が少量散布
9			平安時代(?)、斜面の小さな畑地、土師器少量散布
10			平安時代(?)、製塩土器、須恵器、土師器が少量散布
11			平安時代(?)、土師器1点
12			バス停から月浜に入る所の丘陵上、貝層発達、土器1点（時期不明）
13			駐車場脇（東側）の畑地、須恵器1点
14			丘陵斜面の畑地、土師器1点
15			〃　、須恵器1点
16			〃　、土師器少量散布
17			東北大学生発見、未確認
18			谷奥の斜面、貝殻散布
19			東北大学生発見、未確認、18あるいは20の可能性がある。
20			土器（時期不明）少量散布
21			貝殻が散布
22			貝殻が散布、現代の貝殻である可能性あり
23			貝殻(層)露出、稲ヶ崎への登口で、地蔵さんなどのある崖の対岸の斜面、時期不明
24			貝殻散布
25			水田の畔で製塩土器1点
26			浜の西側に偏って製塩土器集中、他はやぶのため不明
27			人工的な洞穴、内部に井戸状のもの、棚を設けたものなどあり、水神と壁に刻んだものあり松島町雄島にある岩窟と類似しているのが注目される。単なる資材置場とは異る
28			平安時代、底の平らな製塩土器が荒れた畑地に散布、前面の水田中の掘りおこされた土塊には貝殻も多量に含む
29			平安時代、砂と砂にはさまれて、20cm前後の厚さのある包含層(製塩土器・土師器・炭化物)が露出浜一帯に包含層は広がると思われる。最良の状態に保たれている製塩遺跡
30	022	メカル浜貝塚	岬が宮城県沖地震でこわれ、島状になったため未確認
31			貝殻散布
32			平安時代(?)、水田の堀の中に製塩土器、水田下にのびるものと思われる。
33			古墳時代、山際の堅い土層に製塩土器・土師器（塩釜式？）
34	020 024	蛤浜遺跡	貝殻散布

番号	県遺跡地名表番号	遺跡名	内容
35	020 024	蛤浜遺跡	貝殻散布
36	020 024	〃	〃
37			製塩土器1点
38			製塩土器1点
39			神社脇の斜面に貝層露出、土器未確認
40			水田脇で製塩土器1点
41			製塩土器1点
42			製塩土器1点
43			貝殻散布、44a の延長かもしれない
44a	004～007	里浜貝塚	所謂台囲地区、縄文（前・中・後)、弥生、貝層がよく発達
44b	〃	〃	台地上、貝殻の散布は少ない
44c	〃	〃	東斜面、貝層あり、縄文前期
44d	〃	〃	海岸には製塩土器、貝層が発達、製塩土器は平底と尖底、尖底は縄文晩期大洞C_2式期の可能性あり、平底は平安時代、海岸より一段高い方は遺物包含層
44e	〃	〃	貝層がよく発達、縄文晩期
44f	〃	〃	所謂寺下地区、貝層がよく発達、縄文(晩)弥生(大泉、桝形)人骨の多数出土した地区
44g	〃	〃	所謂袖窪、梨木、畑中などの地区をふくむ、今回は東側で縄文前期の貝層も発見
44h	〃	〃	製塩土器、土器少量
44i	〃	〃	貝殻散布
44j	〃	〃	貝殻散布（貝層露出）
44k	〃	〃	縄文（後）土器少量
44l	〃	〃	土器少量散布
44m	〃	〃	包含層、縄文土器
44n	〃	〃	貝殻散布
45a			斜面上方に貝層露出、よく発達した貝層
45b			貝層、土師器、縄文土器（晩)、製塩土器
46			斜面下端近くから海岸まで土器散布、縄文時代の製塩遺跡の可能性あり 斜面上方に土師器も散布
47			砂浜に製塩土器、汀線まで分布
48			東北大学生が発見、未確認
49			東北大学生が発見、未確認
50			砂浜に厚さ約30cmの遺物包含層が露出、製塩土器、土師器、斜面途中に貝殻散布
51			製塩土器、土師器、須恵器
52			製塩土器、土師器、須恵器
53	不明①	清水囲遺跡	後藤勝彦氏御教示、未確認
54		江ノ浜貝塚	今回の調査範囲外
55a	009	潜ヶ浦貝塚	宮城県遺跡地図による。今回の調査範囲外
55b	〃	〃	後藤勝彦氏御教示、未確認

※　この表は東北歴史資料館 藤沼邦彦氏の御協力により作製した。

Ⅳ 色麻（しかま）古墳群

調査要項

調査地区：宮城県加美郡色麻町四釜地区

調査期間：昭和53年4月10～14日

調査面積：1,540,000㎡

調査主体者：宮城県教育委員会

調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：丹羽　茂・阿部　恵
真山　悟・太田　昭夫
小川　淳一

調査協力：宮城県農政部・古川土地改良事務所
色麻町教育委員会・色麻土地改良区

１．位置と環境

今回の分布調査は、加美郡色麻町四釜地区内の約1,540,000㎡を対象として実施された。調査地区は、県道岩出山・吉岡線に沿ってのびる四釜の町並の西方に位置し、鳴瀬川の支流、花川の北岸に接する部分、東西1.8km、南北約0.9kmの範囲である。

色麻町付近には奥羽山脈から派生する標高200～100mの加美丘陵が、東に向って樹枝状にのびている。加美丘陵は鳴瀬川やその支流の大小の河川によって複雑に開析されており、その流域には上・中・下位面の段丘からなる小野田低地や大崎低地に連なる扇状地性低地が発達している。四釜地区は花川流域に形成された花川扇状地の東端部分にあたっており、標高は50～30mである。

色麻町内にはこの花川扇状地をはじめとして扇状地、段丘、丘陵上などに旧石器時代以降多くの遺跡の存在が知られており、現在まで44ヶ所の遺跡が確認されている（宮城県教委：1976・1978）。今回の調査範囲内にも、古くから蝦夷塚などの名称で知られ、昭和11年には清水東四郎氏によって発掘が報告され（清水：1938）、昭和25年には伊東信雄氏（伊東：1955）などによって詳細な分布調査が行なわれている色麻古墳群の上郷支群が含まれている。

昭和25年の伊東氏らの調査によって、色麻古墳群は花川北岸の上郷地区に149基、南岸の高野地区に91基、計240基の所在が認められており（第４図）、そのうち上郷105・109・135号墳は昭和26年3月に伊東氏らによって発掘調査され、昭和44年には高野44号墳が志間泰治氏によって、実測調査されている（伊東：1955、志間・佐々木：1950、氏家：1977）。

２．調査の成果

今回の調査は昭和25年の段階で149基の古墳が確認されている色麻古墳群上郷支群の現状を把握することと、従来調査対象地区内では発見されていない遺物包含地の確認を主眼として行なわれ、対象地区内を詳細に調査した。発見された遺物の包含地や古墳状の高まり、石積み、石組みなどは$\frac{1}{1000}$の地形図に地点を書きこみ、確認№を付して、所定の項目を記録化した。

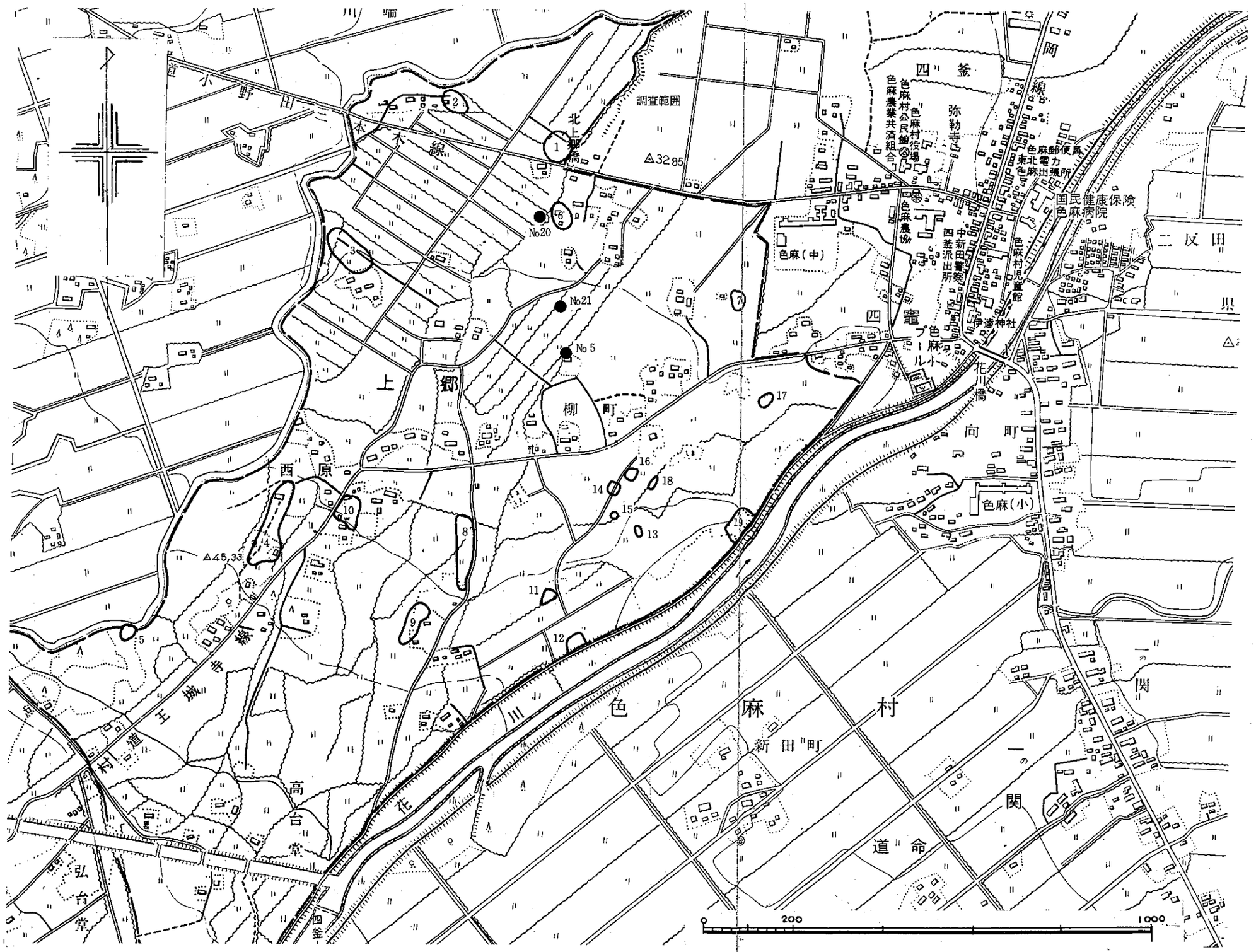
〈遺物包含地〉 19ヶ所の遺物包含地が認められ（第１図）、その詳細は第１表にまとめた。また、採集遺物の一部を第２図に示した。縄文時代の遺物を出土した３遺跡のうち西昌寺・新宿Ａ遺跡は石器、新宿Ｂ遺跡では縄文施文の破片が１点出土しているだけで、この時期の遺物は少なかった。弥生時代の遺物を出土した遺跡は６遺跡ある。西原Ａ・大坊遺跡では比較的多くの破片が出土しており、上大坊Ａ・大坊遺跡出土土器は十三塚式に、西原Ａ・下原Ｂ遺跡出土土器は天王山式に比定できる。今回の調査でもっとも多かったのが、土師器・須恵器片の散布する遺跡で16遺跡ある。荒井・下原Ｂ遺跡では古墳時代後期に比定できる土師器が、滝本Ａ・田中後遺跡など多くの遺跡では製作にロクロを使用した土師器などが出土している。

〈**色麻古墳群**〉103ヶ所の古墳およびその痕跡と思われるものが確認された。大部分を第３図に、一部を第１図に示し、その詳細は第２表にまとめた。第２表の備考欄には昭和25年の分布図（第４図）と位置関係が対応したものを〈伊東№〉として記した。今回確認された103ヶ所のうち約70ヶ所が伊東分布図と対応したが、なかには道路の変化などによって対応関係を特定できないものも数ヶ所ある。また、今回確認され、伊東分布図に該当しないものや、伊東分布図にあって今回確認されなかったものも多くある。

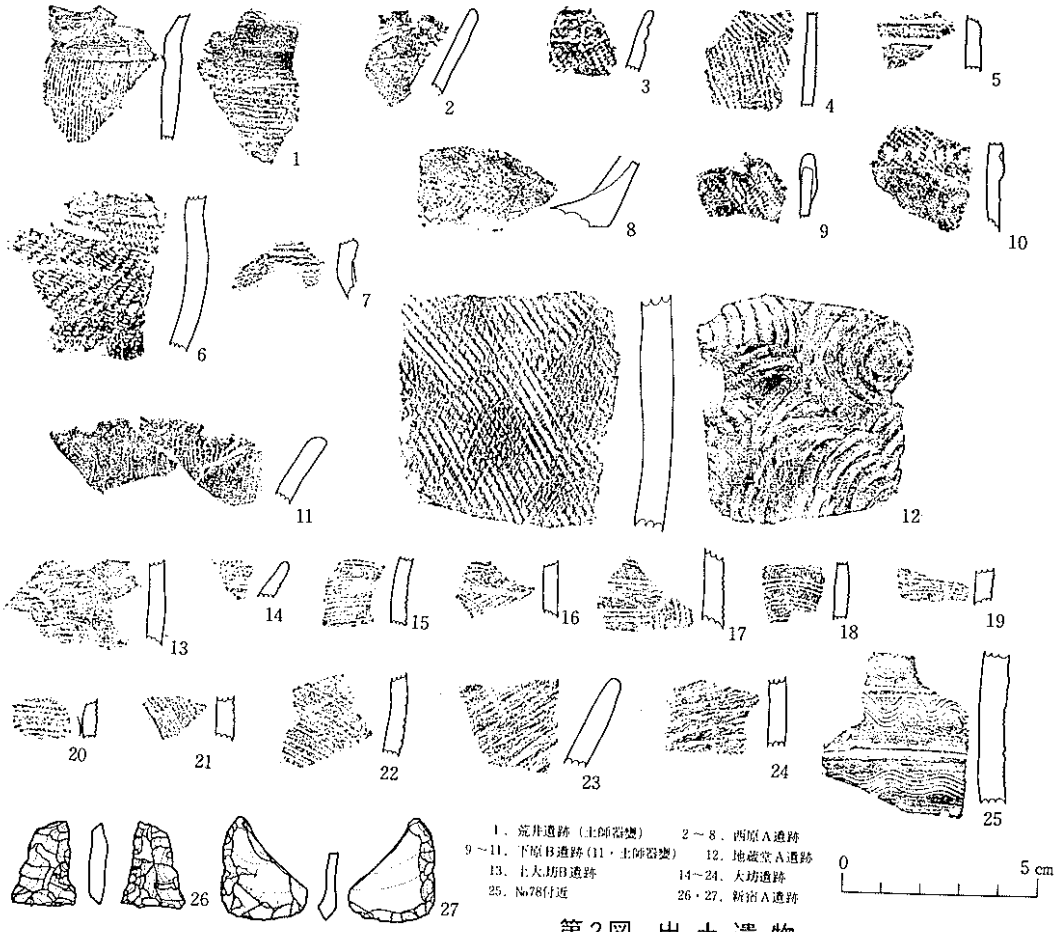
なお、第４図・第３表として掲載したのは、昭和25年11月に当時東北大学助教授であった伊東信雄氏の指導のもとに東北大学考古学教室が分布調査を実施し、作製したものである。未発表の資料の掲載を御許可下さった伊東氏に感謝いたします。

表１　四釜地区分布調査区内 包含地一覧表

番号	遺跡名	所在地	立地	地目	時代	範囲	出土品
1	滝本Ａ遺跡	四釜字滝本111-1.115-3.107.109	台地	畑地	平安	2,000㎡	土師器片６点、甕…ロクロ痕あり、坏…内黒、糸切底
2	大木戸遺跡	〃 大木戸37-1.41.43.49	台地	宅地・畑地	平安	5,000㎡	土師器片１点
3	荒井遺跡	〃 荒井 603.201.304	台地	畑地	古墳	4,000㎡	土師器片13点、須恵器片１点（栗囲式）
4	西原Ａ遺跡	〃 西原1021.755.671.616.433 731.1101.1205.295	台地	畑地・杉林	弥生	5,000㎡	弥生土器片30数点（天王山式）
5	西原Ｂ遺跡	〃 〃 88.72.71.87.70-1	台地	畑地・山林	弥生 奈良～平安	10,000㎡	弥生土器片３点、土師器片１点
6	西昌寺遺跡	〃 荒井 29.30 西昌寺弐番 12.7	台地	畑地	縄文 奈良～平安	2,000㎡	土師器片５点、フレーク１点
7	田中後遺跡	〃 田中後 43	台地	水田	奈良～平安	2,000㎡	土師器片４点、須恵器片2点（回転糸切）
8	新宿Ａ遺跡	〃 新宿弐番53.56.62.65.64.63	台地	畑地	縄文 平安	2,500㎡	土師器片14点（内黒３点）須恵器片4点 石鏃１点、スクレーパー１点
9	新宿Ｂ遺跡	〃 〃 〃 50.33.46.48.47.36.34	台地	畑地	縄文 奈良～平安	3,500㎡	縄文土器片１点、土師器片２点、 須恵器片1点、鉄器片１点
10	新宿Ｃ遺跡	〃 〃 壱番20.23-3.19-2.12.14	台地	畑地	奈良～平安	3,000㎡	土師器片２点
11	下原Ａ遺跡	〃 下原49	台地	畑地	不明	300㎡	土師器片数点
12	下原Ｂ遺跡	〃 〃 15-1.24.37.95-1.97	台地	畑地	弥生 古墳・平安	500㎡	土師器片10余点、弥生土器片2点、 （天王山式）
13	深山遺跡	〃 深山５	台地	水田	奈良～平安	300㎡	須恵器片1点
14	地蔵堂Ａ遺跡	〃 地蔵堂33-1.31	台地	水田	奈良～平安	1,500㎡	土師器片5点、須恵器片6点
15	天王遺跡	〃 天王24	台地	畑地	奈良～平安	120㎡	須恵器片1点、土師器片2点
16	地蔵堂遺跡	〃 地蔵堂31	台地	水田	奈良～平安	1,000㎡	須恵器片16点、土師器片1点
17	上大坊Ａ遺跡	〃 上大坊1-8.1-9	台地	畑地	弥生 奈良～平安	1,000㎡	弥生土器片3点、須恵器片1点、不明7点 （十三塚式）
18	上大坊Ｂ遺跡	〃 〃 14-3	台地	畑地	弥生	225㎡	弥生土器片1点、不明３点
19	大坊遺跡	〃 大坊158-1.159.157-1 下原14-11.14-12.13.14.15.16	台地	畑地	弥生	3,200㎡	弥生土器片50数点、フレーク4点 （十三塚式）



第1図 遺跡分布図　No.5・20・21は古墳番号（表2に対応する）

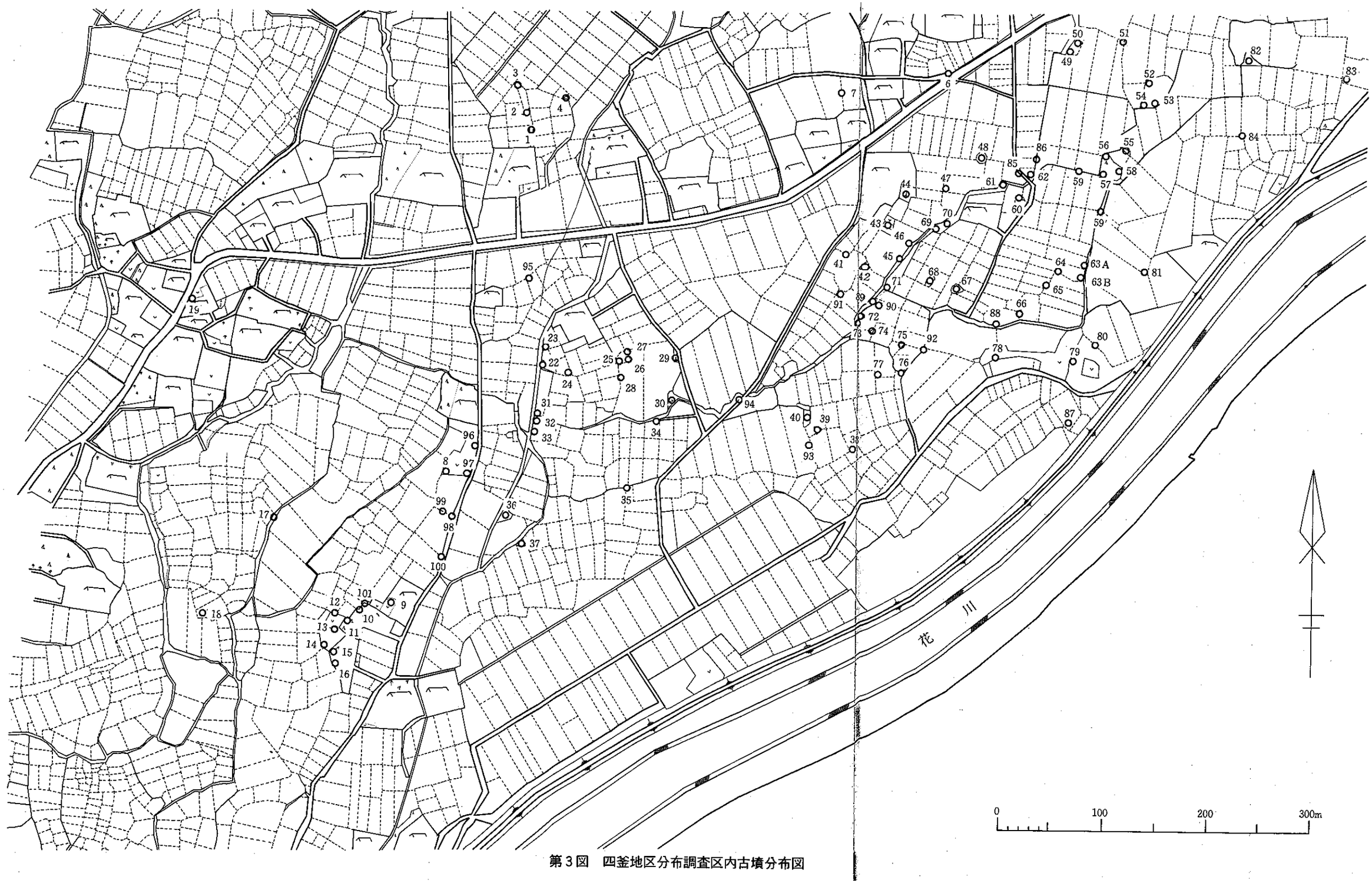


第2図　出土遺物

古墳遠景

表2　四釜地区分布調査区内古墳一覧表

No	規模	形態	所在地	地目	出土品	備考	〈伊東 No〉
1	径 4.5m　高0.5m	円墳(?)	四釜字柳町 176	畦畔		積石あり	
2	径 4.0m　高0.5m	円墳(?)	〃　〃　175－2	畦畔		〃	〈伊東 148〉
3	径 5.0m　高0.5~0.6m	円墳(?)	〃　〃　175－2	畦畔		〃	〈伊東 149〉
4	径 5.0m　高0.8m	円墳(?)	〃　〃　175－1	畦畔			〈伊東 147〉
5	不明	不明	〃　田中74	屋敷内		石室を屋敷神として転用(?)	
6	不明	不明	〃　〃　67	道路		左側壁のみ現存 (2.9m)	
7	(径6m)　?	(円墳)　?	〃　地蔵堂2	水田		開田により消滅	
8	5.3m×7.1m　高1.2m	円墳(?)	〃　新宿弐番63	畑の隅		径30cm程度の礫多し	〈伊東 121〉
9	径 9.2m　高 2m	円墳	〃　〃　49	屋敷内		石室露出、長軸方向N－20°－E	〈伊東 135?〉
10	径 5.0m　高0.6m	円墳(?)	〃　〃　46－2	屋敷内		東側半分が削平	〈伊東 136?〉
11	径 5.0m　高1.5m	円墳(?)	〃　〃　〃	屋敷内			〈伊東 139〉
12	径6.8m　高1.5m	円墳	〃　〃　36.39.46-1	畑			〈伊東 140〉
13	径7.5m　高1.6m	円墳	〃　〃　36	畑			〈伊東 142〉
14	5.0m×8.8m 高 2m	円墳(?)	〃　〃　27.30.36	畑			〈伊東 143〉
15	径 5.0m　高0.8m	円墳	〃　〃　33.34	屋敷内		石室が部分的に露出N－80°－E	〈伊東 144〉
16	径 6.0m　高 1m	円墳(?)	〃　〃　34	屋敷内		東側削平	〈伊東 145〉
17	不明	不明	〃　新宿壱番44	水路		古墳の残骸と思われる	
18	径2.1m　高0.3~0.5m	円墳(?)	〃　〃　33－1	水田			
19	径6.8m　高1.5m	円墳	〃　〃　1－8	屋敷内		墳丘上に六部地蔵尊あり	
20	径3.0m　高0.5m	円墳(?)	〃　荒井30	屋敷内		墳丘上に供養塔と奥壁らしい石あり	
21	径4.7m　高0.7~0.75m	円墳(?)	〃　柳町62	周囲水田		墓地に近接	
22	14.7m×5.0m 高 1m	円墳(?)	〃　地蔵堂20－1	水田		積石あり	
23	6.8m×1.0m 高 1m	円墳(?)	〃　〃　〃	畦畔		〃	
24	4.8m×4.0m 高1.3m	円墳(?)	〃　〃　〃	水田水	須恵器(甕)片1点	〃	〈伊東98or100〉
25	6.6m×3.2m 高 1m	円墳(?)	〃　〃　26－1	荒地		〃	〈伊東 94〉
26	6.4m×4.5m 高 1m	円墳(?)	〃　〃　〃	荒地		〃	〈伊東 93〉
27	3.6m×2.5m 高0.6m	円墳(?)	〃　〃　〃	荒地		〃	
28	11.0m×2.3m 高 1m	円墳(?)	〃　〃　24	畦畔		〃	
29	8.2m×3.0m 高0.7m	円墳(?)	〃　〃　〃	墓地		〃	〈伊東 91〉
30	14.6m×8.3m 高 不明	円墳(?)	〃　〃　51	荒地		〃	〈伊東 92〉
31	径2.8m　高0.5m	円墳(?)	〃　〃　22－2	水田		〃	
32	5.1m×3.1m 高0.8m	円墳(?)	〃　深山16－3	畦畔		〃	
33	5.8m×2.0m 高0.5m	円墳(?)	〃　〃　〃	畦畔		〃	
34	5.5m×2.7m 高0.5m	円墳(?)	〃　〃　11	畦畔		〃	
35	6.1m×4.0m 高 1m	円墳(?)	〃　〃　13.14-2.22.26	畦畔		〃	〈伊東 96〉
36	13.8m×11.0m高 1m	円墳(?)	〃　〃19	墓地		〃	〈伊東 101〉
37	8.0m×5.0m 高0.8m	円墳(?)	〃　字下原51	墓地		〃	
38	3.7m×10.7m 高1.5m	円墳(?)	〃　深山5	水田	須恵器1点(付近より)		〈伊東 69〉
39	7.5m×7.7m 高1.3m	円墳(?)	〃　〃　4	水田		積石あり	〈佐東 71〉
40	16.6m× 8.6m 高1.8m	円墳(?)	〃　〃　6	水田		〃	〈伊東 72〉
41	2.0m× 4.3m 高0.5m	円墳(?)	〃　天王17.19	畦畔			〈伊東 55〉
42	6.6m× 8.4m 高1.3m	円墳(?)	〃　〃　18	水田		大石あり	〈伊東 54〉
43	4.2m×8.0m 高1.3m	円墳(?)	〃　〃　15.16	墓地・畑			〈伊東 45〉
44	12.3m×14.1m 高1.5m	円墳(?)	〃　〃　12	山林		氏神あり	〈伊東 44〉
45	5.6m× 8.0m 高 1m	円墳(?)	〃　〃　17	水田		中央部を水路が貫通	〈伊東 53〉
46	2.8m×4.8m 高 1m	円墳(?)	〃　〃　〃	水田			〈伊東 46〉
47	2.0m×11.0m 高0.8m	円墳(?)	〃　〃　11	水田		積石あり	
48	10.0m×11.4m 高1.5m	円墳(?)	〃　〃　10	墓地		表面に円礫多し	〈伊東 11〉
49	4.9m×6.2m 高1.2m	円墳(?)	〃　字上大坊14－4	墓地		積石あり	
50	径 5.2m　高0.6m	円墳(?)	〃　〃　〃	墓地		〃	
51	2.4m×6.5m 高 1m	円墳(?)	〃　〃　1－3	水田	須恵器坏(高台付)1点		



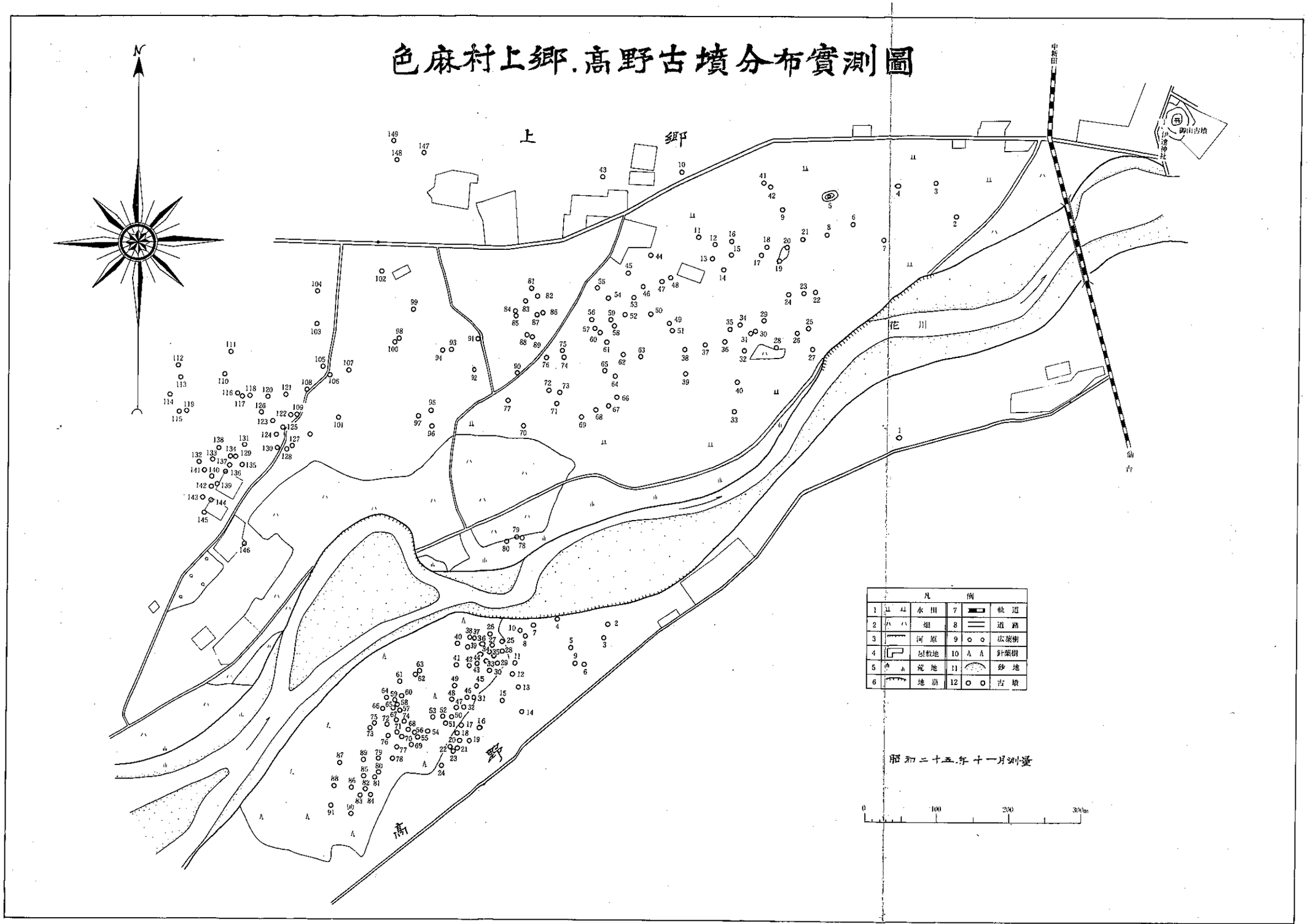
第３図　四釜地区分布調査区内古墳分布図

52	5.5m×10.3m 高1m	円墳	四釜字字上大坊1－9	畑 地		積石多し	〈伊東 5〉
53	2.1m× 3.6m 高0.5m	円墳(?)	〃 〃 〃	畑 地		礫多し	
54	2.1m× 2.9m 高0.8m	円墳(?)	〃 〃 〃	畑 地		積石あり	
55	4.7m× 9.2m 高2m	円墳(?)	〃 〃 5.1-14	水 田	須恵器甕1点	〃	〈伊東 21〉
56	6.6m× 9.7m 高1.2m	円墳	〃 〃 4	山 林		〃	〈伊東 19〉
57	4.7m×11.5m 高0.8m	円墳(?)	〃 〃 〃	山 林		〃	〈伊東 20〉
58	3.5m× 4.7m 高0.5m	円墳(?)	〃 〃 〃	山 林		〃	
59	2.1m× 5.7m 高0.8m	円墳	〃 〃 3.6	水 田		〃	〈伊東 17〉
59′	不 明	不 明	〃 〃 6	水 路			
60	6.6m× 8.3m 高2.2m	円墳	〃 〃 11	水 田		積石多し保存良好	〈伊東 14〉
61	7.5m×10.0m 高1.3m	円墳(?)	〃 〃 〃付近	荒 地		積石あり	〈伊東 13〉
62	2.4m× 4.9m 高1m	円墳(?)	〃 字天王4	水 田		〃	〈伊東 15〉
63A	合わせて	円墳(?)	〃 字大坊6付近	荒 地		〃	〈伊東 29〉
63B	4.3m×19.7m 高1.2m	円墳(?)	〃 〃 〃	荒 地		〃	〈伊東 30〉
64	1.3m× 4.2m 高0.8m	円墳(?)	〃 字上大坊6.7	水 田		礫多し	〈伊東 34〉
65	2.9m× 5.5m 高1m	円墳(?)	〃 〃 〃	水 田		〃	〈伊東 35〉
66	5.0m× 7.9m 高1.5m	円墳(?)	〃 〃 7	水 田	須恵器(甕)片1点	積石あり	〈伊東 37〉
67	10.4m× 8.5m 高1.8m	円墳(?)	〃 上大坊9.14－1	畦 畔		〃	〈伊東 49〉
68	11.0m× 5.0m 高1.3m	円墳(?)	〃 〃 14－1	水 田		〃	〈伊東 50〉
69	径 8.0m 高1.5m	円墳(?)	〃 〃 14－3	畑 地		〃	〈伊東 47〉
70	径 8.5m 高1.5m	円墳(?)	〃 〃 〃	畑 地		〃	〈伊東 48〉
71	9.0m×11.0m 高1.5m	円墳	〃 〃 14－1	雑木林		〃	〈伊東 52〉
72	2.7m×5.9m 高1m	円墳(?)	〃 深山11－1	水 田		〃	〈伊東 60〉
73	3.2m×5.0m 高0.8m	円墳(?)	〃 〃 1－1	水 田		〃	
74	3.7m× 4.3m 高1.3m	円墳	〃 〃 〃	水 田	須恵器片2点	〃	〈伊東 61〉
75	4.1m× 6.0m 高1.3m	円墳(?)	〃 〃 〃	水 田		〃	〈伊東 62〉
76	5.0m×6.6m 高1.2m	円墳(?)	〃 〃 2	水 田		〃	
77	3.6m× 5.5m 高1.2m	円墳(?)	〃 〃 〃	水 田		〃	〈伊東 65〉
78	径4.0m 高 不 明	円墳(?)	〃 河原4	畑 地	須恵器(甕)頸部片1点	〃	〈伊東 39〉
79	2.7m× 6.0m 高0.8m	円墳(?)	〃 大坊158－1	畑 地		〃	〈伊東 40〉
80	3.8m× 7.3m 高0.8m	円墳(?)	〃 〃 〃	畑 地		〃	
81	5.2m× 6.7m 高1.2m	円墳(?)	〃 〃 140－1	水 田		〃	〈伊東 26〉
82	9.0m×11.2m 高1.3m	円墳(?)	〃 〃 82	原 野		〃	〈伊東 4〉
83	4.0m× 5.0m 高1m	円墳(?)	〃 〃 86－1	水 田		〃	〈伊東 2〉
84	2.0m× 8.7m 高0.8m	円墳(?)	〃 〃 103.110.111-4	畦 畔	須恵器(甕)片1点		〈伊東 7〉
85	径5.0m 高0.8m	円墳(?)	〃 天王4	道路下		側壁のみ	〈伊東 12〉
86	2.0m×7.0m	円墳(?)	〃 〃 、上大坊3	畦 畔		若干の高まりと積石	〈伊東 16〉
87	9.1m×11.3m 高1m	円墳(?)	〃 河原14－11,14－15	畑 墓			〈伊東 33〉
88	2.0m×5.0m 高0.8m	円墳(?)	〃 上大坊7	水 田		水路に沿って若干の高まりと積石あり	〈伊東 38〉
89	2.0m× 4.5m 高0.3m	円墳(?)	〃 深山1－1付近	畦 畔			〈伊東 59〉
90	不 明	円墳(?)	〃 〃 〃	水 田		大石のみ3個あり、若干の高まりあり	〈伊東 58〉
91	径1.0m 高0.5m	円墳(?)	〃 天王18	畦 畔		大石3個あり	〈伊東 56〉
92	不 明	円墳(?)	〃 深山1－1	畦 畔		水路の石積として転用	〈伊東 63〉
93	不 明	円墳(?)	〃 〃 3	畦 畔		積石あり	
94	不 明	円墳(?)	〃 〃 7	水路の脇		〃	〈伊東 90〉
95	不 明	円墳(?)	〃 地蔵堂33－1	水 田		畦畔に積石あり	
96	2.5m× 4.0m 高0.5m	円墳(?)	〃 新宿弐番64	畑 地		積石あり	
97	不 明	円墳(?)	〃 〃 55	畑 地		東西7m、南北7mのL状に積石	
98	不 明	円墳(?)	〃 〃 〃	畑・水田		南北に8m程の積石	
99	不 明	円墳(?)	〃 〃 53.55	畑・水田		東西5m程の積石	
100	不 明	円墳(?)	〃 〃 52	畑・水田		南北5m程の積石	
101	不 明	円墳(?)	〃 〃 46－2	宅 地		径4m程の積石	〈伊東 137?〉

表３　四釜古墳実測表（昭和25年11月調査）

上郷支群									
No.	東西 (m)	南北 (m)	高さ (m)	備考	60	6.2	2.8	1.3	石積
1				御山古墳	61	5.3	5.8	1.4	
2	3.0	3.2	0.6		62	7.0	4.9	1.3	
3	5.0	7.6	0.6	半壊	63	6.0	4.0	1.0	石積
4	11.5	11.3	1.5		64	6.6	6.6	1.1	石積
5	27.0	25.0	2.2		65	4.4	6.5	1.6	
6	6.0	5.2	1.2	石有	66	4.5	4.5	1.2	
7	7.2	2.2	0.8	畦	67	5.0	2.8	1.1	
8	5.4	3.6	1.1	畦・石積	68	5.0	3.1	1.0	
9	13.0	14.0	2.7	石有	69	12.0	3.5	1.8	半壊・奥壁残
10	10.0	7.5	0.9		70	5.8	4.5	1.3	石積
11	10.0	12.0	2.0		71	6.3	6.6	1.2	石積
12	5.8	6.8	1.2		72	14.8	10.6	1.8	
13	7.0	10.6	1.3		73	6.7	1.8	0.8	
14	8.0	7.0	2.1		74	9.4	2.2	1.2	
15	4.7	6.0	1.0		75	4.2	4.6	1.1	石積
16	6.4	6.9	1.6		76	12.6	11.0	1.2	
17	8.5	9.7	2.2		77	3.4	3.0	0.8	
18	9.0	4.7	2.0		78	6.0	5.5	1.2	
19	9.0	12.0	1.0		79	7.3	9.7	1.3	
20	9.0	9.5	1.2		80	5.5	4.8	0.8	
21	10.3	6.8	2.0		81	2.6	3.2	0.8	石積
22	3.1	3.5	1.2	畦畔	82	5.6	6.7	1.2	石積
23	3.0	1.4	0.8		83	4.0	4.8	1.0	石積
24	12.0	2.0	1.0		84	5.6	11.4	1.6	
25	4.0	4.3	1.0		85	3.0	5.0	1.3	
26	4.8	4.5	1.0	畦・半壊	86	3.3	5.0	0.9	須恵器片出土
27	3.7	3.5	0.7		87	3.3	5.2	1.0	石積
28	7.0	3.2	1.2		88	3.3	5.2	0.6	石積
29	7.7	6.5	1.4		89	8.2	8.5	1.7	
30	4.5	6.4	1.2		90	3.3	2.4	1.2	石有・須恵器片
31	3.5	5.2	1.4		91	3.5	7.0	1.0	
32	4.5	5.7	1.4		92	7.5	10.0	1.4	わずかに石露出
33	13.0	14.8	2.0		93	3.5	6.0	0.5	
34	4.0	1.7	0.6		94	4.0	9.0	1.0	畦
35	2.8	6.0	1.0		95	5.5	7.0	1.0	
36	4.7	6.0	1.2	石室露出	96	5.0	3.0	1.0	
37	6.8	6.3	1.4		97	3.0	4.0	0.7	
38	5.0	2.0	1.0		98	5.2	5.0	1.0	
39	6.3	3.0	0.8		99	3.6	5.0	0.7	石積
40	2.4	6.3	0.6		100	5.5	5.5	1.0	
41	4.7	5.0	1.0		101	5.2	6.5	1.0	南側に墓地あり
42	7.0	7.5	1.2		102	1.7	3.0	0.5	畦の中石のみ
43	8.8	9.7	2.1		103	5.3	1.2	1.0	畦にわずかに石
44	15.0	10.2	1.6		104	7.7	4.2	1.0	畦にわずかに石
45	8.0	7.0	2.0		105	10.6	8.0	1.9	石少々・上面畑
46	6.2	3.0	1.2	畦・半壊	106	7.0	3.0	0.6	
47	10.2	8.7	1.2		107	6.0	6.2	1.0	石散乱
48	8.5	5.0	1.7		108	11.0	10.0	1.2	
49	10.0	9.0	1.8		109	8.0	9.0	2.0	石なし
50	8.3	10.3	1.6		110	6.5	7.0	1.4	石積
51	5.3	4.2	1.0		111	2.5	5.0	0.5	
52	9.7	8.0	1.8		112	4.0	3.0	0.8	
53	3.2	7.2	0.8	畦	113	3.6	2.4	0.8	畦畔
54	6.6	7.0	1.7		114	2.4	4.4	0.8	石積
55	4.0	2.8	0.8	畦・半分残	115	4.0	2.4	0.7	石積
56	3.0	4.0	0.9	畦	116	4.0	5.2	1.0	
57	3.0	2.8	0.9		117	5.0	4.0	1.1	
58	3.2	2.5	1.4		118	5.0	3.2	0.8	
59	5.5	3.5	0.2	石積	119	5.4	3.6	0.9	
					120	6.0	3.8	1.2	石積

色麻村上郷.高野古墳分布實測圖



第4図

121	6.4	6.5	2.0	石　　積
122	7.0	4.5	1.8	
123	8.0	3.6	1.4	
124	9.0	6.0	1.4	
125	8.0	6.0	1.2	
126	10.7	3.4	—	
127	4.7	5.0	1.8	
128	3.8	9.2	1.2	
129	3.4	4.5	1.2	
130	12.3	7.0	2.0	
131	7.5	5.8	1.4	石　　積
132	8.2	7.2	1.9	
133	3.6	3.8	1.0	
134	5.7	6.4	1.7	
135	8.0	6.0	2.1	
136	4.0	6.3	1.7	
137	5.6	3.8	1.4	
138	5.0	7.0	1.2	
139	7.6	5.2	1.4	
140	7.4	5.0	1.4	
141	6.0	7.7	2.0	
142	7.2	5.2	1.6	石　　積
143	6.0	10.0	2.0	
144	5.0	6.0	1.0	
145	6.0	6.0	1.6	
146	8.0	5.3	1.2	
147	5.0	4.5	0.6	
148	3.6	4.0	0.8	
149	4.0	6.0	1.0	

高　野　支　群

No.	東西 (m)	南北 (m)	高さ (m)	備　　考
1	2.8	5.5	1.0	
2	4.4	6.5	1.3	
3	5.8	7.0	1.5	
4	4.7	3.2	0.7	
5	8.0	6.4	1.7	
6	8.0	8.5	1.5	
7	4.0	3.2	0.9	
8	5.0	4.3	0.9	
9	11.1	6.8	1.8	
10	3.8	3.7	1.1	
11	5.0	6.6	1.2	
12	4.9	5.2	1.1	
13	7.8	7.0	1.5	
14	5.4	8.8	1.6	
15	6.4	6.3	1.1	
16	8.2	8.0	1.7	
17	7.0	9.5	1.2	
18	8.6	8.5	1.1	
19	6.0	7.2	1.0	
20	5.3	5.5	1.0	
21	5.9	6.6	0.8	
22	8.6	8.0	0.6	
23	5.6	8.0	1.1	
24	8.3	8.3	1.6	
25	4.2	4.4	0.9	
26	8.6	10.0	1.3	
27	4.0	5.7	0.6	
28	4.0	7.4	1.2	
29	2.0	3.0	0.7	
30	8.0	7.5	1.2	石室露出
31	8.0	8.5	1.5	
32	7.9	7.4	1.4	
33	5.2	6.1	1.1	
34	4.5	4.2	1.1	
35	3.0	4.0	0.45	
36	4.2	3.7	0.25	
37	3.6	3.45	0.9	
38	4.6	5.0	1.1	
39	10.0	9.8	1.4	
40	10.5	10.4	2.4	
41	5.3	5.2	1.0	
42	11.2	11.0	2.2	
43	7.0	7.0	1.3	
44	5.0	6.3	1.2	
45	5.5	5.6	0.9	
46	7.0	6.6	0.8	
47	7.5	8.6	1.4	
48	11.0	10.0	2.2	
49	9.4	8.9	2.0	
50	4.6	4.2	0.9	
51	6.0	7.4	1.25	
52	4.4	6.4	0.7	
53	6.4	8.23	1.15	
54	7.58	6.9	0.9	
55	6.1	5.45	0.8	
56	—	—	—	石郭遺構・大石散布
57	7.4	7.1	0.95	
58	3.0	6.0	0.9	
59	4.6	3.6	0.92	
60	2.0	5.2	1.15	
61	5.4	6.6	1.05	
62	3.6	4.8	0.9	
63	7.2	3.2	1.2	
64	5.95	6.7	1.2	
65	6.9	7.6	0.95	
66	10.1	8.0	1.45	
67	5.4	6.4	1.05	
68	5.3	6.4	1.0	
69	10.4	7.4	1.65	
70	6.2	7.4	1.4	
71	4.8	6.0	1.0	
72	7.2	8.6	1.4	
73	5.3	5.0	0.55	
74	5.4	6.4	0.75	
75	5.4	6.5	0.8	
76	4.2	5.4	8.0	
77	5.8	6.2	1.05	
78	5.6	6.0	1.05	
79	7.2	7.6	1.4	
80	6.0	5.4	1.08	
81	4.4	4.6	0.8	
82	3.4	4.0	0.4	
83	4.2	4.7	0.45	
84	5.0	5.2	0.45	
85	6.2	8.0	0.9	
86	13.5	11.4	1.85	
87	7.4	7.4	1.0	
88	9.83	9.5	1.35	
89	6.0	6.3	0.8	
90	10.3	10.0	1.1	
91	10.0	10.0	1.15	

引用・参考文献

清水東四郎（1938）「加美郡四竈の古墳」宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告 12

伊東　信雄（1955）「宮城県加美郡上郷古墳」日本考古学年報４．昭和 26 年度

志間　泰治（1970）「古川市塚原古墳群」古川市文化財報告第１集
佐々木茂楨

氏家　和典（1977）「仙台平野における横穴式石室古墳について」宮城県多賀城跡調査研究所
研究紀要Ⅳ

宮城県教委（1976）「宮城県遺跡地名表」

〃　　（1978）「　　〃　　」改訂版

V　玉　造　遺　跡

調査要項

遺 跡 所 在 地: 宮城県玉造郡岩出山町一栗字玉造

調 査 主 体 者: 宮城県教育委員会

調 査 担 当 者: 宮城県教育庁文化財保護課

調査員：早坂　春一・平沢英二郎
小井川和夫・斎藤　吉弘
遊佐　五郎・阿部　博志
小川　淳一

調 査 期 間：昭和53年11月13～12月2日
昭和54年1月12日

調査対象面積：約450,000㎡

実発掘面積：635㎡

遺 跡 記 号：ＦＨ（宮城県遺跡地名表登録番号　35140）

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と自然環境 31

2　遺跡の歴史的環境 31

Ⅱ　調査の方法と経過

1　調査区の設定と調査の方法 34

2　調査の経過 34

3　実測図の作成 37

Ⅲ　調査の成果

1　基本層序 37

2　出土遺物 37

A　微高地南西部出土の遺物 38

B　微高地南東部出土の遺物 40

C　低湿地出土の遺物 42

D　表面採集の遺物 42

3　発見された遺構 43

1）遺物包含層を掘り込んでいるピット 43

2）土器埋設遺構 43

3）住居跡 43

Ⅳ　調査のまとめ　－遺跡の範囲とその内容－ 44

Ⅰ．遺跡の位置と環境

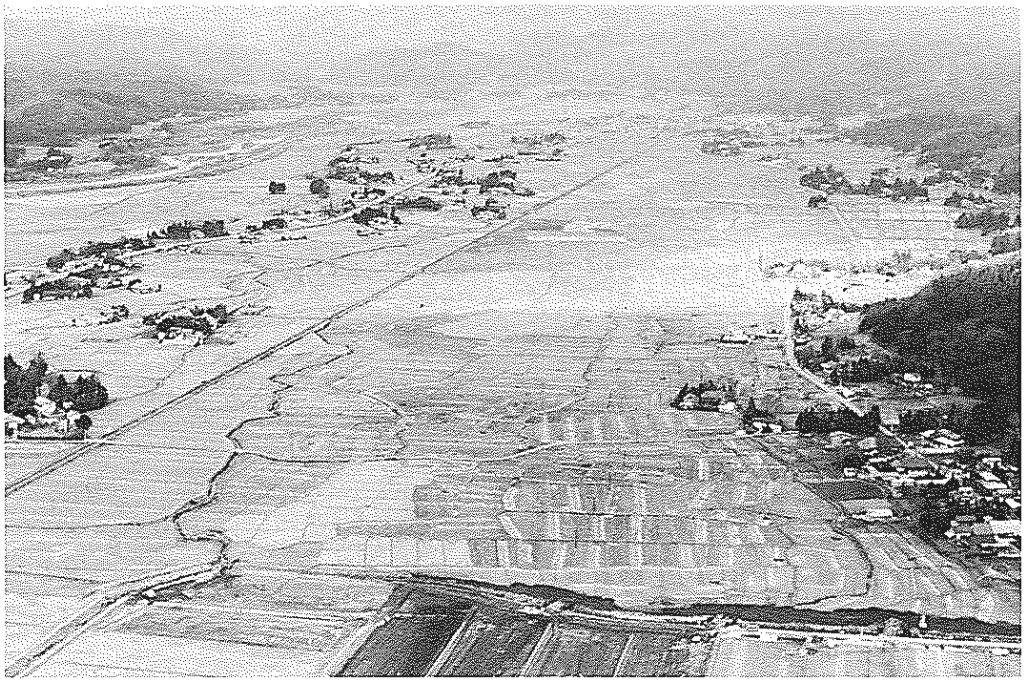
１．遺跡の位置と自然環境（第１図）

玉造遺跡は、国鉄陸羽東線西岩出山駅と池月駅のほぼ中間地点、玉造郡岩出山町一栗字玉造に所在する。

本遺跡は、江合川（荒雄川）によって形成された河岸段丘上に立地する。宮城県北西部には奥羽山脈東麓からのびて広がる陸前丘陵が発達している。鬼首盆地に源を発して東流する江合川は、この丘陵を開析して、北部の築館丘陵と南部の玉造丘陵とに分け、その両岸には５群の段丘を形成している。岩出山町池月より下流には広く氾濫原や谷底平野を発達させ、さらに、その下流には広大な大崎低地を形成し、河南町和渕付近で北上川に合流して大平洋に注いでいる。本遺跡を含む岩出山町北西部地域の段丘の配置は非対称で、北岸の築館丘陵よりに発達が著しい。この地域に発達している段丘は５群の段丘中、下位段丘である竹原面と上川原面であり（小元：1966）、本遺跡は、現河床と20m～40mの比高を有する竹原面上の南端に立地している。遺跡の立地している地域の標高は68m～79mであり、南東に緩やかに傾斜している。現在の地目は、水田および畑地である。

２．遺跡の歴史的環境（第２図）

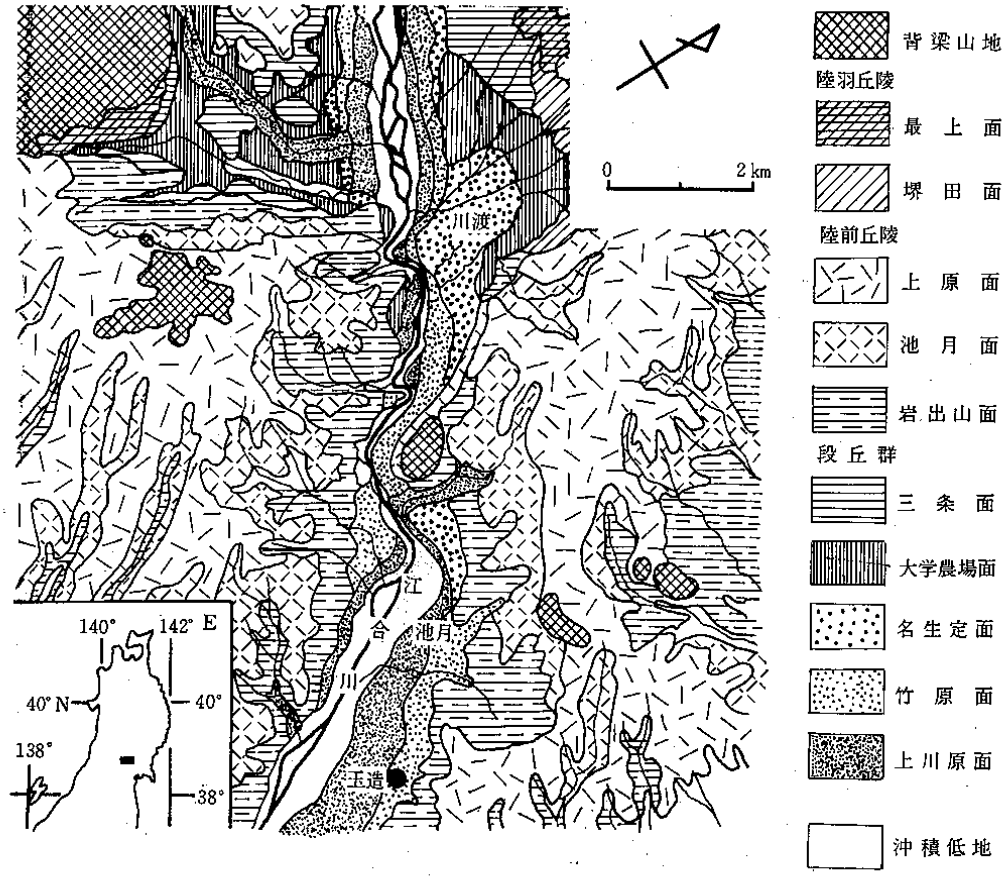
岩出山町には現在155ヶ所の遺跡が確認されている。（石器文化談話会：1978）。時代別の遺跡数は、旧石器時代29、縄文時代72、弥生時代40、古墳時代24、奈良～平安時代32、中世～近



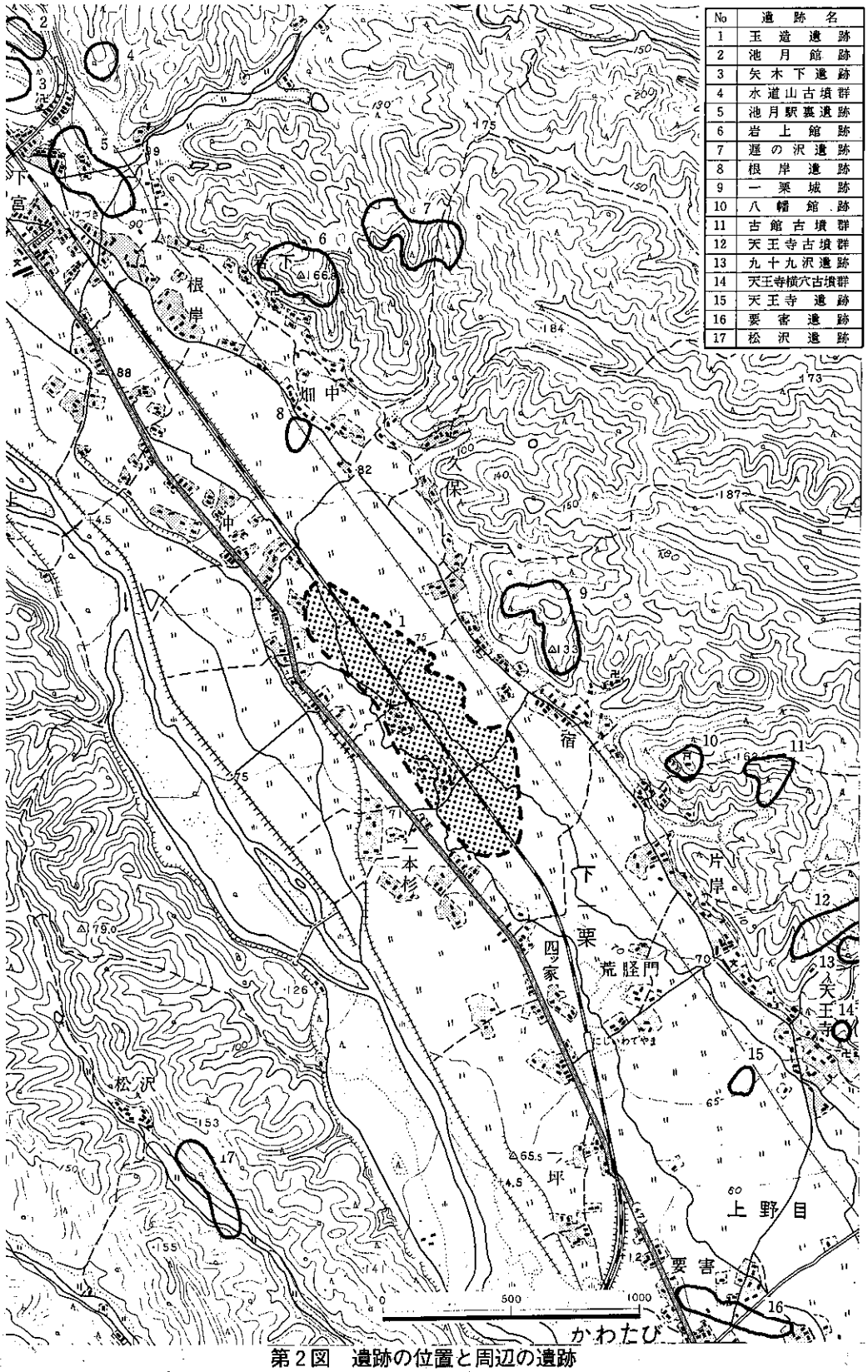
遺　跡　遠　景

世42であり、各時代を通して遺跡が存在している考古学上貴重な地域である。これらの遺跡の多くは、江合川が形成した段丘上や両岸に沿って連なる築館丘陵、玉造丘陵上に立地している。

玉造遺跡の周辺にも数多くの遺跡が確認されている。本遺跡の立地する江合川北岸の段丘上には、根岸遺跡（縄文晩期）、天王寺遺跡（縄文後・晩期）、要害遺跡（縄文中・晩期、平安）等が立地しており、この段丘が縄文時代中期以降、人々の生活の場として機能していたことが知られる。また、段丘背後の築館丘陵南斜面には、矢木下遺跡（縄文前・晩期、平安）、池月駅裏遺跡（縄文中・後・晩期）、遅の沢遺跡（縄文早期）、縄文早期押型文土器が県内で最初に発見された九十九沢遺跡（興野・遠藤：1970、縄文早・前・晩期、弥生）等の集落跡や、水道山古墳群（方墳）、古館古墳群（方墳）、天王寺古墳群（方墳、円墳）、天王寺横穴古墳群といった古墳群、さらに、池月館、岩上館、八幡館、大崎義隆の臣一栗兵部隆春の居城といわれる一栗城等の中世の館跡の存在も認められる。



第１図　岩出山町北西部地域の地形学図（小元：1966）



No	遺跡名
1	玉造遺跡
2	池月館跡
3	矢木下遺跡
4	水道山古墳群
5	池月駅裏遺跡
6	岩上館跡
7	遅の沢遺跡
8	根岸遺跡
9	一栗城跡
10	八幡館跡
11	古館古墳群
12	天王寺古墳群
13	九十九沢遺跡
14	天王寺横穴古墳群
15	天王寺遺跡
16	要害遺跡
17	松沢遺跡

第2図　遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅱ．調査の方法と経過（第３図）

一栗地区の県営ほ場整備事業に伴う分布調査において、当該ほ場整備対象地区約450,000㎡内に遺物の散布している地点が認められた。しかし、遺物の散布している地点が水田であるため、遺跡の範囲確定が困難であった。今回の調査は、この水田下における遺跡の範囲確認と、その内容把握を主な目的として実施された。

１．調査区の設定と調査の方法

経線上の点である原点Ａ（国家座標：Ｘ－1,800,000・Ｙ＋145,100,000）と原点Ｂを結ぶ線を南北の基準線とし、原点Ａ上で直交する線を東西の基準線として、対象地区全体に60m単位の方眼を組んだ。グリッド名は、３m単位に東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字で示した。また、東西方向は、60mを単位とした大きなブロック（Ａ・Ｂ……）に区画した。

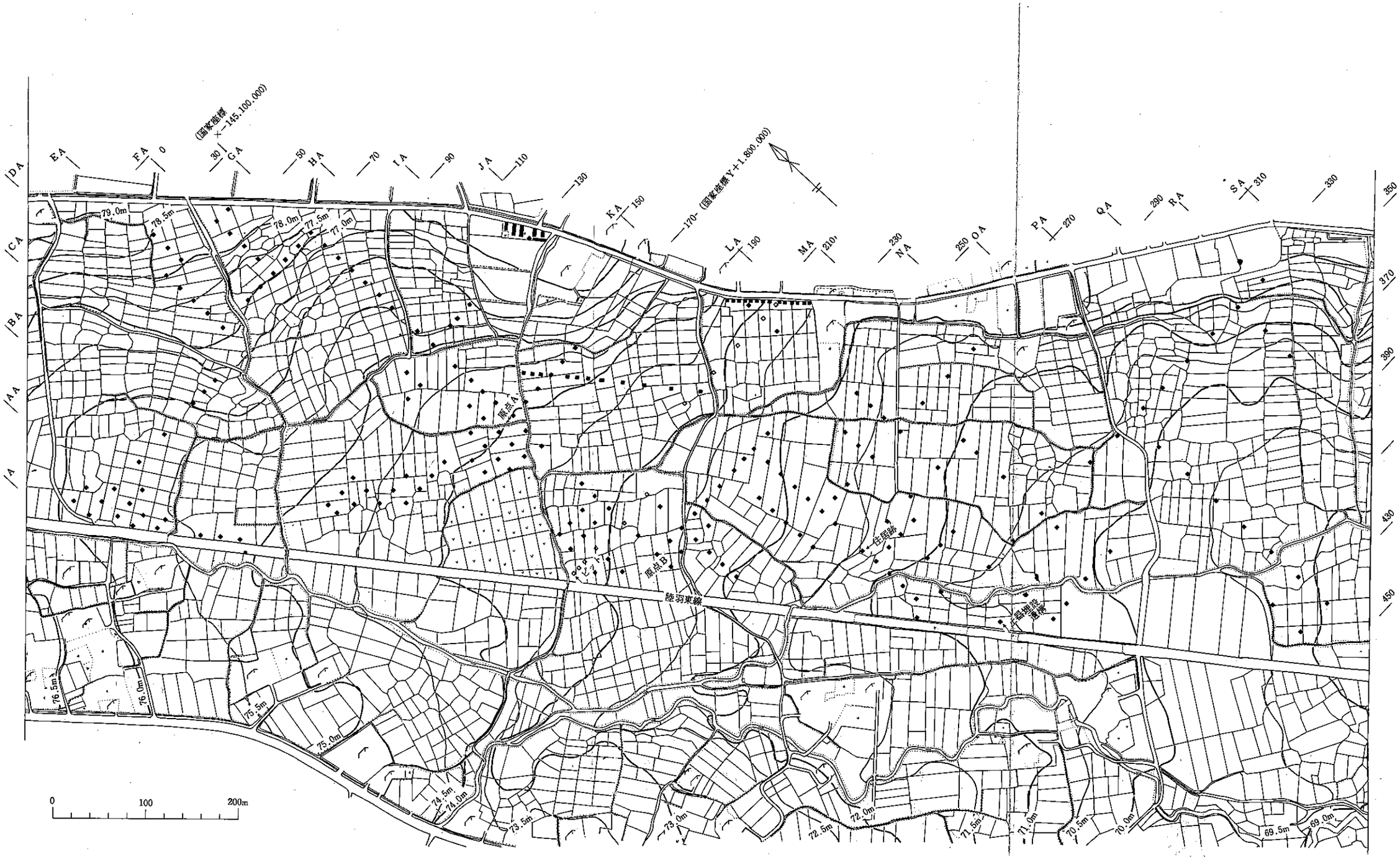
調査の方法は、遺物の散布している地域には20m毎に、３m×３mのグリッドを設定し、その内1.5m×1.5mを調査した。散布地以外の地域には必要に応じて40m～80m毎にグリッドを設定した。陸羽東線寄りの南西部の麦畑と南東部の水田の一部には地権者の都合でグリッドを設定しなかった。

２．調査の経過

発掘調査は、昭和53年11月13日に始まった。調査対象面積は約450,000㎡である。

調査は、初め、原点Ａを中心として、東西170ライン、南北ＦＴラインにグリッドを設定した。この結果、この対象区北西部には、水田耕作土の下に、にぶい黄褐色土層（火山灰？）、砂礫層、グライ化したシルト・粘土層が堆積しており、かって、低湿地であったことが認められた。一方、ＦＴラインの南の方向にのばしたグリッドでは、ＦＴ218～ＦＴ240で水田耕作土下に、黒褐色土層が堆積しており、この層から縄文時代の土器の出土をみた。この層の広がりと、その包含物を検討するために、周囲にグリッドを入れた結果、東西ＥＮ226～ＧＨ226、南北ＦＦ206～ＦＦ231の範囲に、縄文時代中・後・晩期の遺物を含む遺物包含層が確認された。さらに、この遺物包含層の形成されている面は、シルト層、砂礫層より成る微高地であることが判明した。このため、その後の調査の方向は、この微高地の範囲確定と微高地上の遺物散布のあり方を把握することを目的に進められた。このような目的に沿って、対象区東部にもグリッドを設定した。

以上のような調査によって、この段丘上には、第９図に示すような、陸羽東線よりに形成されている微高地と、その背後に発達した低湿地があったことが明確となった。そして、また、この微高地上からは、南西部で、縄文時代中～晩期の遺物包含層とピット、南東部で、縄文時代中期の土器埋設遺構と平安時代の住居跡が発見された。さらに、調査期間中に、すでに工事の開始されている南東部においても遺物の出土が認められた。


(国家座標 X−145,100.000)
(国家座標Y+1,800.000)
EA
FA
GA
HA
IA
JA
KA
LA
MA
NA
OA
PA
QA
RA
SA
DA
CA
BA
AA
A
0
30
50
70
90
110
130
150
170
190
210
230
250
270
290
310
330
350
370
390
430
450
79.0m
78.5m
78.0m
77.5m
77.0m
原点A
原点B
陸羽東線
住居跡
76.5m
76.0m
75.5m
75.0m
74.5m
74.0m
73.5m
73.0m
72.5m
72.0m
71.5m
71.0m
70.5m
70.0m
69.5m
69.0m
0
100
200m

第3図 グリッド配図

３．実測図の作成

発掘したグリッドの内、縄文時代中～晩期の遺物包含層については、層の堆積状況を把握するために$\frac{1}{20}$の断面図を作成した。その他の全てのグリッドは、各層位毎にレベリングを行なった。また、検出された遺構については、確認面での写真撮影によって記録するに留めた。

Ⅲ．調査の成果

１．基本層序

今回の調査によって、ほ場整備対象地区の段丘上に、微高地と低湿地が形成されていたことが確認された。第５・６図は、その微高地と低湿地の東西断面図である。

〇基本的な層序は、次の通りである。

第Ⅰ層：水田耕作土。暗褐色シルト層・褐色シルト層（鉄分沈澱の割合により二分される）である。出土遺物は、縄文土器（中～晩期）、石器、土師器、須恵器、中世陶器である。（図版１・２）

第Ⅱ層：黒褐色シルト層。低湿地にのみ認められる。（図版１・２）

第Ⅲ層：にぶい黄褐色土層。低湿地にのみ堆積している火山灰（？）層。無遺物層。（図版１・２）

第Ⅳ層：にぶい褐色シルト層。低湿地にのみ堆積している。出土遺物は、土師器、須恵器である。（図版１・２）

第Ⅴ層：砂礫層、青灰色シルト・粘土層。シルト・粘土層は、グライ化が著しい。出土遺物は、縄文土器、土師器、須恵器である。（図版２－１）

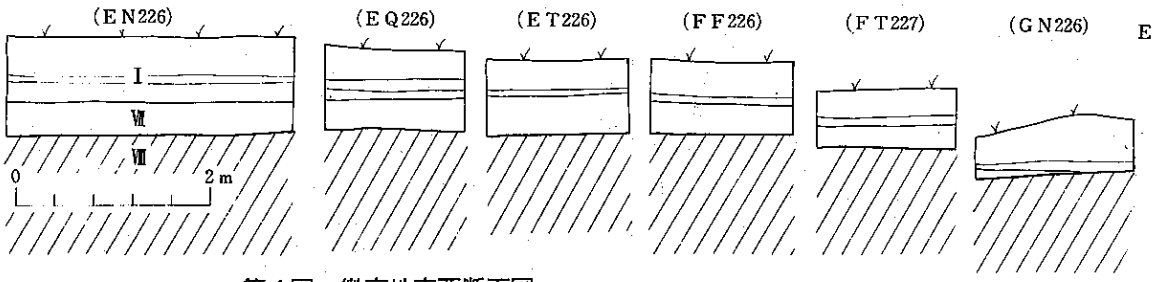
第Ⅵ層：低湿地に、部分的に発達している粘土質植物遺体層。極暗褐色土層、黒褐色土層より成る。出土遺物は、縄文土器（後・晩期）である。（図版２－２）

第Ⅶ層：黒褐色シルト層。微高地南西部に分布し、今回の調査内で確認された範囲は約15,600㎡である。東部および南東部の低湿地に緩やかに傾斜しながら消滅する。本層は厚さ10㎝～20㎝で、縄文土器（中～晩期）を含む遺物包含層である。縄文土器の多くは、磨滅が著しく、層理面に対して不規則な状態で出土している。その中で、晩期の土器は、本層の上部からの出土が多く、また、本層を掘り込んだピットからも出土している。（図版１－１・２）

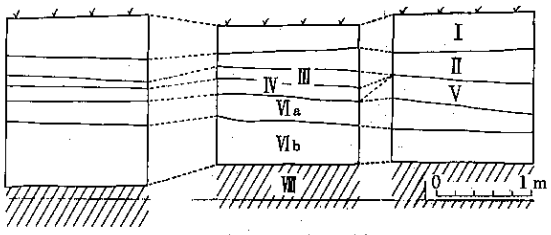
第Ⅷ層：灰黄褐色の砂質シルト層・砂礫層より成る基盤層。微高地南東部においては、本層が第Ⅰ層直下に認められる。縄文時代中期の土器埋設遺構、平安時代の住居跡の確認面である。微高地と低湿地での、本層上面の比高は、約３ｍである。

２．出土遺物

出土した遺物は、縄文土器（中～晩期）、石器、土師器、須恵器、中世陶器あわせて整理箱３



第４図　微高地東西断面図



層位	層No	土　色	土性	混入物・その他
第Ⅰ層	1	暗　褐　色(10 YR3/4)	シルト	
	2	褐　色 (10 YR5/4)	シルト	鉄分沈澱量大
	3	褐　色(10 YR5/4)	シルト	鉄分沈澱量小
第Ⅱ層	4	黒　褐　色(10 YR3/4)	シルト	粘性あり
第Ⅲ層	5	に ぶい 黄褐色 (10 YR5/4)	タ　フ	(湿潤起源火山灰？)
第Ⅳ層	6	に ぶい 褐色(7.5YR5/4)	シルト	粘性あり
第Ⅴ層	7	明 褐 色(10 YR5/6) 灰　色 (5 BG5/1)	ブロック クレイ	砂礫・グライ化層
第Ⅵ層	8	極 暗 褐 色(7.5YR3/4)	クレイ	植物遺体を含む
	9	黒　褐　色(7.5YR3/1)	クレイ	植物遺体を含む 遺物を含む
第Ⅶ層	10	黒　褐　色(10 YR3/4)	シルト	遺物を多量に含む
第Ⅷ層	11	灰 黄 褐 色(10 YR5/2)	シルト サンド	基盤層

第５図　低湿地東西断面図

箱分である。それらの多くは、磨滅が著しく、小破片であるため、ここでは、比較的時期判別の可能な遺物を中心に記述することとする。

Ａ　微高地南西部出土の遺物（第６図）

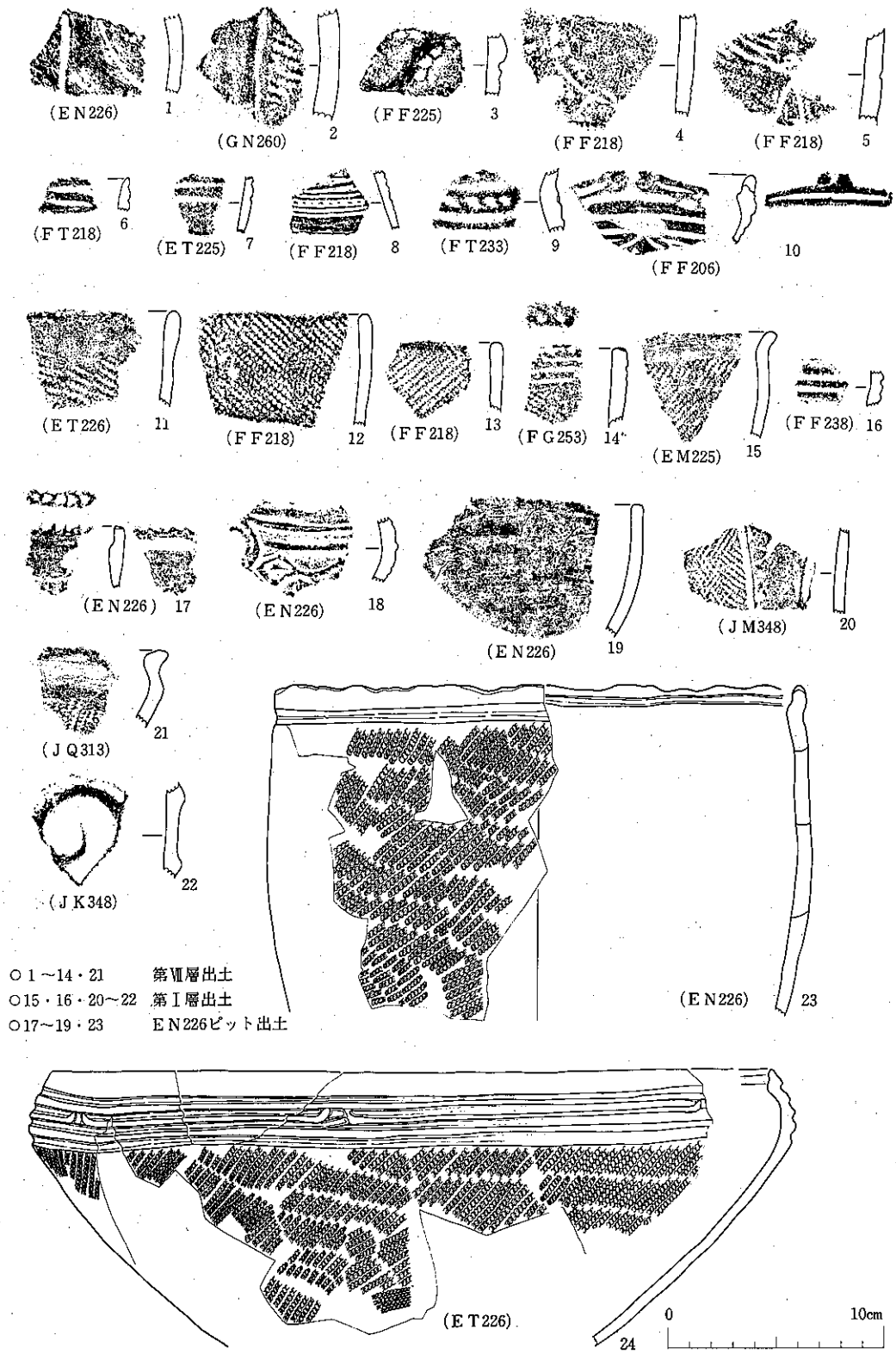
この地域は、遺物包含層（第Ⅶ層）の形成されている地域であり、また、水田耕作土（第Ⅰ層）からは、縄文土器（中期）、土師器、須恵器が出土している。

１）遺物包含層出土土器（第６図１～14・24）

○〈第６図１～５〉は、深鉢形土器である。沈線や隆起線によって区画され、区画文内に縄文の施文されているもの（第６図１・２・５）、隆起線に刺突文の施されているもの（第６図３）、沈線文のみが施されているもの（第６図４）がある。

○〈第６図６～９・11・12～14〉は、深鉢形土器の口縁部、頸部である。２条の横走する沈線が施されているもの（第６図６・７）、１～２条の沈線文の間に刺突文帯を配すもの（第６図８・９、第６図８は注口土器の可能性がある）、口唇部に刻目を有し、口縁部に２条の沈線を施すもの（第６図14）、口縁部に磨消帯を有し、以下に縄文を施すもの（第６図11）、縄文のみを施文したもの（第６図12・13）がある。

○〈第６図10・24〉は、浅鉢形土器である。（第６図10）は、口唇部に２個１対の突起を有し、突起からは沈線がのびている。口縁部外面には２条の沈線文とその下部に沈線によるπ字状文が施されている。口縁部内面でも沈線が１条めぐっている。（第６図21）は、口縁部が内弯気味の大形のもので、口縁部には狭い磨消帯を有し、その下に横走する平行沈線文を主体としてπ字文を配した工字状文を施している。口縁部内面にも１条の沈線がめぐっている。また口縁部外面には、朱彩の痕跡が認められる。



○1～14・21　第Ⅶ層出土
○15・16・20～22　第Ⅰ層出土
○17～19・23　EN226ピット出土

第6図　出 土 遺 物（微高地出土土器）

◎以上の土器の所属時期は、（第６図１～４）は縄文時代中期後葉（大木９・10式）、（第６図５）は後期初頭（南境式）、（第６図６～14・24）は晩期中葉～後葉（大洞C_1～A式）に属するもので、その内、（第６図10）は大洞C_2式、（第６図21）は大洞A式である。

２）第Ⅰ層出土土器（第６図15・16）

○深鉢形土器の口縁部と頸部である。口縁部に磨消帯を有し、以下縄文の施されたもの（第６図15）、２条の沈線の施されたもの（第６図16）がある。

◎以上の土器の所属時期は、晩期である。

３）石器（第７図14～26、表１、第８図－２・３）

出土した石器は15点であり、その他に多くの剥片がある。石器15点の内、13点が石鏃（無茎－２、有茎－10）である。他は、磨石と凹石である。石鏃は５点が第Ⅶ層から、８点が第Ⅰ層からの出土である。磨石、凹石は、第Ⅶ層出土である。これらの石器は、縄文時代中～晩期のいずれかの時期に伴うものである。

表１．石鏃計測表

図	長さ(mm)	幅 (mm)	重さ(g)	石　材	完・不完	出土地点・層位
第図14	18.5	11.0	0.5	細粒凝灰岩	完	FF206・Ⅶ層
第図15	28.0	16.0	2.6	流紋岩	完	FT218・Ⅶ層
第図16	28.5	17.5	2.7	石英安山岩質凝灰岩	完	EN226・Ⅶ層
第図17	36.0	14.0	4.9	石英安山岩質凝灰岩	完	EQ226・Ⅶ層
第図18	26.0	15.0	3.1	玉髄	不完	ET225・Ⅶ層
第図19	19.5	9.0	0.3	石英安山岩質凝灰山	完	FF218・Ⅰ層
第図20	28.5	19.0	3.0	石英安山岩質凝灰岩	完	FF218・Ⅰ層
第図21	28.0	15.0	2.0	硬質頁岩	完	FF218・Ⅰ層
第図22	21.0	11.0	1.3	玉髄	不完	FF218・Ⅰ層
第図23	32.5	20.5	6.4	石英安山岩質凝灰岩	完	FF218・Ⅰ層
第図24	16.5	12.2	1.8	石英安山岩質凝灰岩	完	FT211・Ⅰ層
第図25	19.2	11.5	0.8	細粒凝灰岩	完	FT211・Ⅰ層
第図26	32.0	12.0	2.6	石英安山岩質凝灰岩	完	EN226・Ⅰ層

B　微高地南東部出土の遺物

（第６図20～22、表２）

この地域の層序は水田耕作土（第Ⅰ層）、基盤層（第Ⅷ層）であり、第Ⅰ層出土の遺物は、縄文土器（中期）と土師器、須恵器であるが、これらのほとんどは磨滅が著しく、小破片であるために時期判別が困難である。ここでは、縄文土器のみをあげることにし、土師器、須恵器は、破片集計表（表２）を参照されたい。

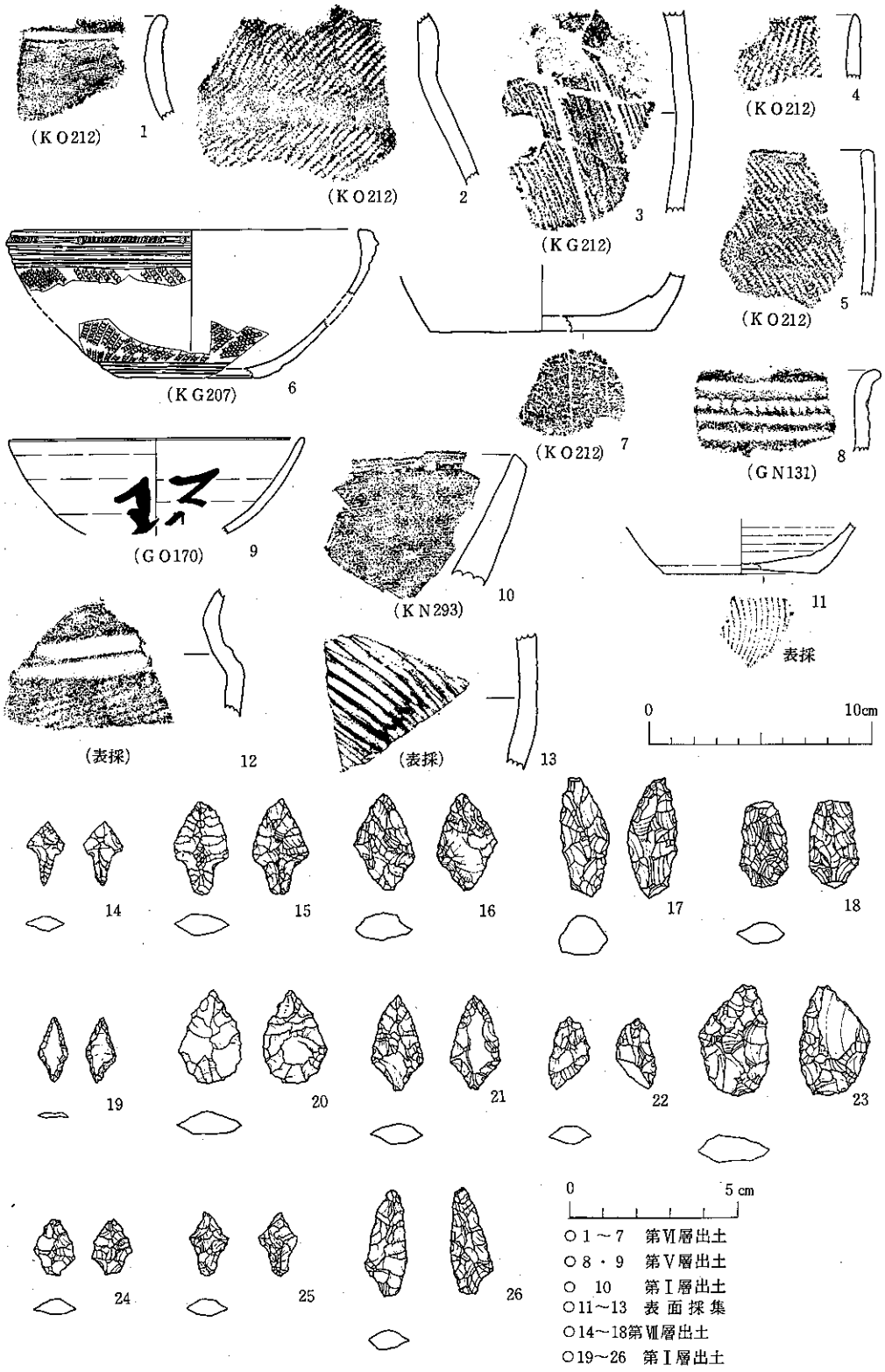
○（第６図20）は、深鉢形土器の体部である。沈線によって区画され、区画文内に縄文を施している。（第６図21）は、浅鉢形土器の口縁部である。強く外反する口縁部外面には磨消帯を有し、以下に縄文が施されている。（第６図22）は、深鉢形土器体部の隆起線による渦巻文である。

◎以上の土器の所属時期は、中期後葉（大木９・10式）である。

表２　微高地南東部出土
土師器・須恵器片集計表

土　師　器				
グリッド名	層位	点数	器形　(部位)	器面調整等
ＩＪ 294	置上面	?	坏(口縁部～体部) 1	ロクロ－ミガキ内黒
(住居跡)			坏(口縁部～体部),2	
			甕 (体部), 1	ケズリ－ナデ
			壺 (口縁部), 1	横ナデ－ナデ
			器 (不明), 1	ロクロ－ナデ
ＫＴ 293	Ⅰ	29	坏 (口縁部), 1	横ナデ－ミガキ
			坏 (体部), 1	不明－ミガキ内黒
			甕 (体部), 14	刷目毛－ナデ
			甕 (体部), 1	不明－ナデ
			不明 (8)	
ＫＪ 354	Ⅰ	1	坏 (体部～底部)	沈線－ミガキ内黒
ＮＨ 423	Ⅰ	4	坏 (体部), 1	
			甕 (体部), 1	ケズリ－ナデ
			甕 (口縁部), 1	
			不明 (1)	

須　恵　器				
グリッド名	層位	点数	器形　(部位)	器面調整等
ＩＣ 294	Ⅰ	2	坏(口縁～体部・底部)	回転糸切り
ＫＴ 293	Ⅰ	1	坏 (口縁部)	
ＪＦ 325	Ⅰ	1	甕 (体部)	ケズリ－ナデ
ＪＭ 348	Ⅰ	2	坏(口縁部),壺(体部)	
ＮＨ 423	Ⅰ	1	甕 (体部)	ケズリ－ナデ



第7図　出土遺物（低湿地出土土器・微高地出土石器1）

C　低湿地出土の遺物（第７図１～10）

低湿地堆積土層中、遺物の出土が認められたのは、第Ⅳ層～第Ⅵ層である。これらの遺物は、微高地からの流れ込みと考えられる。

１）第Ⅵ層出土土器（第７図１～７）

○〈第７図１〉は、壺形土器の口縁部で、１条の沈線がめぐらされている。（第７図２）は、壺形土器の肩部である。縄文を施文した後に、磨消帯をめぐらしている。（第７図３）は、深鉢形土器の体部である。撚糸文を施文した後に、沈線によって区画し、区画内を磨消している。

（第７図４・５）は、深鉢形土器の口縁部である。縄文のみを施文しているものである。（第７図６）は、浅鉢形土器である。口縁部は直立気味で、口縁部外面に４条の沈線を施し、最上部の沈線に彫刻的な刻みを入れている。体部には羽状縄文を施し、体部下端に２条の沈線がめぐっている。（第７図７）は、木葉痕のある底部である。

２）第Ⅵ層出土土器（第７図８．９）

○〈第７図８〉は、深鉢形土器の口縁部である。口唇部は波状を呈し、頸部に１条の刺突文帯と２条の沈線をめぐらしている。

○〈第７図９〉は、須恵器の坏である。体部に、「琢」の墨書がある。（註）

◎以上の土器の所属時期は、（第７図３）は後期初頭（南墳式）、（第７図２・４）は後期後葉（金剛寺式）、（第７図６）は晩期中葉（大洞C_1式）、（第７図８）は晩期中～後葉（大洞C_1～A式）である。

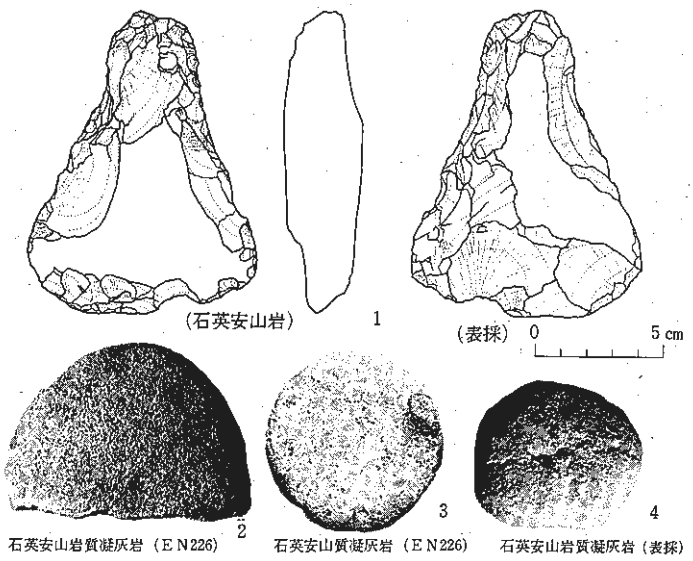
３）第Ⅰ層出土土器（第７図10）

○〈第７図10〉は、中世陶器である。擂鉢の口縁部である。

D　表面採集の遺物

（第７図11～13）

○（第７図12）の深鉢形土器の頸部（２条の沈線と以下に縄文を施文）と（第８図１．４）の打製石斧と凹石は、微高地南西部麦畑から、（第７図11・13）の回転糸切り痕を有する須恵器坏の底部と平行叩き目を有する



第８図　微高地出土石器　２．表採石器

甕の体部は、南東部水田からの表採である。

３　発見された遺構

１）遺物包含層を掘り込んでいるピット（図版３－１）

このピットは、ＥＮ226で検出された。確認面は第Ⅶ層黒褐色シルト層上面である。平面形は40㎝×50㎝の不整楕円形を呈し、深さ20㎝である。ピット内堆積土は黒色土である。このピット内より〈第６図17～19・23〉の遺物の出土をみた。（第６図17）は、深鉢形土器の口縁部で、口唇部に刻目を有し、内面に１条の沈線をめぐらしている。（第６図18）は、注口土器で、注口部の付け根には、黒色のアスファルト状の附着物が認められる。文様帯は、２条の隆沈文と，隆沈文による連続菱形文によって構成されている。（第６図19）は、深鉢形土器の口縁部で、外面は無文である。（第６図23）は、深鉢形土器である。口縁部は直立気味で、波状を呈し、口頸部外面に磨消帯を有している。以下に縄文か施文されている。これらの土器の出土状態には、規則性は認められない。ピットより出土した土器の時期は、晩期中葉～後葉（大洞C_2・Ａ式前後）である。

２）土器埋設遺構（図版３－２）

微高地南東部ＪＭ348で検出された。確認面は第Ⅷ層基盤層である。掘り方平面形は、直径50㎝の円形を呈し、内部に土器を埋設している。土器内部の堆積土は、にぶい黄褐色シルト、掘り方埋土が褐色シルト（炭化物混入）である。埋設土器は、二重になっており、内側の土器の直径は24㎝、外側の土器の直径は36㎝である。外側の土器の外面には、隆起線により区画され区画文内に縄文を施していることが認められた。尚、この遺構は、確認面での観察に留まるものであり、精査を実施しなかった。埋設土器の時期は、中期後葉（大木10式前後）である。

３）住居跡（図版３－３）

微高地南東部ＩＮ294で検出された。確認面は第Ⅷ層基盤層である。平面形は、2.3m×３mの長方形を呈している。耕作による削平をうけ、床面を残すのみである。この住居跡からは、土師器、須恵器が出土した。破片を観察すると、土師器は、坏が製作にロクロを使用し、内面の調整にミガキと黒色処理がされており、須恵器では、坏の底部に回転糸切り痕を有するものがある。このことから、この住居跡の使用時期は、平安時代（表杉ノ入式）であると考えられる。

また、この住居跡の周辺からは、小破片であるが、ロクロ不使用で内面に黒色処理を施し、外面に段、沈線を有する土師器の坏が出土しており、奈良時代の住居跡の存在する可能性も予想される。

Ⅳ．調査のまとめ　－遺跡の範囲とその内容－

発掘調査によって、分布調査時点での現地形の観察だけでは不明であったほ場整備対象地区内における遺跡のあり方が、ほぼ明確になった。

グリッド調査の結果、江合川によって形成された段丘上に、微高地と低湿地が確認され、起伏のある旧地形が復原された。これは、江合川河床の低下による段丘化の過程で、旧氾濫原に形成された後背湿地的な凹地と自然堤防状の微高地であると考えられる。この微高地上からは縄文時代中期後葉～後期初頭、晩期中葉～後葉、奈良～平安時代の各時期の遺物が出土し、遺構としては、縄文時代晩期中・後葉のピット、縄文時代中期後葉の土器埋設遺構、平安時代の住居跡が確認された。さらに、微高地上における遺物の分布状況は、縄文時代中期後葉および奈良～平安時代の遺物は、微高地上に広く分布が認められるが、縄文時代晩期中葉～後葉の遺物は、遺物包含層の形成されている南西部にのみ分布していることか確められた。

以上のことから、この微高地全域、約160,000㎡が遺跡として認定されえる範囲であり、江合川河床の低下による段丘化の過程で、縄文時代中期後葉の人々が居住を開始して以来、断続的に平安時代に至るまで生活の場として、この微高地を選地したことを知らせてくれるものである。このことは、この段丘上に立地している他の遺跡（要害遺跡等）においても同様である。

また、この段丘上微高地の広がりを考慮すれば、本遺跡の範囲は、さらに、今回のほ場整備対象地区の南側（陸羽東線の南側）にも、のびる可能性が強いと思われる。

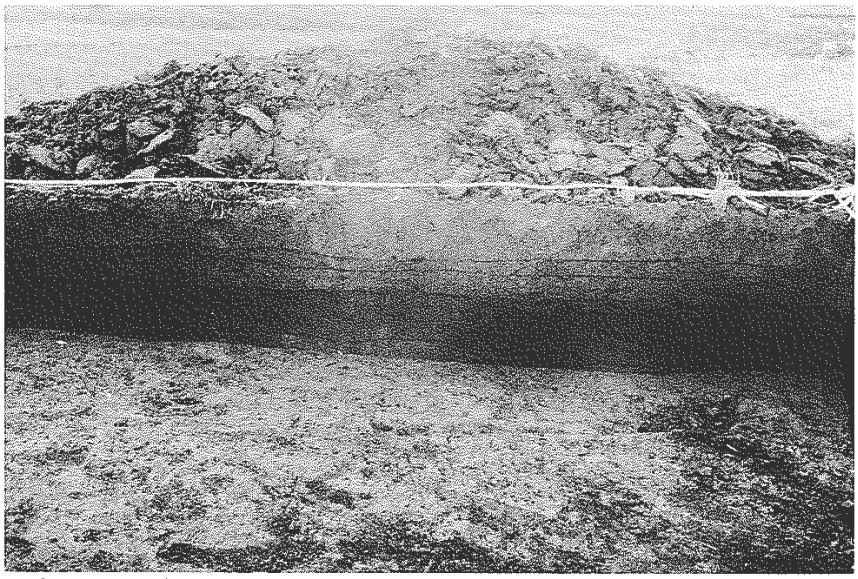
（注）墨書土器については、東北歴史資料館・平川　南氏の御教示を得た。

〈引用・参考文献〉

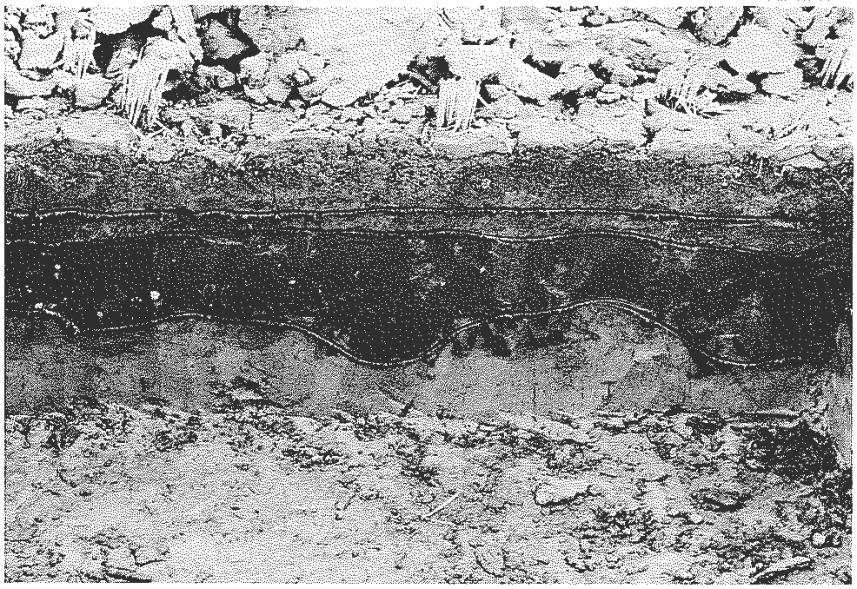
○小元久二夫（1966）「宮城県鳴子盆地の地形発達史」『地理学評論』第39巻第８号
○石器文化談話会（1978）「座散乱木遺跡発掘調査報告書」『石器文化談話会誌第１集』
○宮城県教委・日本道路公団（1978）「上深沢遺跡、東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ」『宮城県文化財調査報告書』第52集
○宮城県教委（1978）「遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書』第46集（修正版）
○宮城県教委（1978）「遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書』第47集（修正版）
○林　　謙作（1965）「東北」『日本の考古学』Ⅱ
○芹沢　長介（1960）『石器時代の日本』
○角田市教委（1976）「梁瀬浦遺跡」『宮城県角田市文化財調査報告第１集』
○一迫町教委（1977）『巻堀遺跡』
○興野・遠藤（1970）「宮城県玉造郡岩出山町の考古学遺跡」『岩出山町史』下巻

第９図　調査対象地区の旧地形

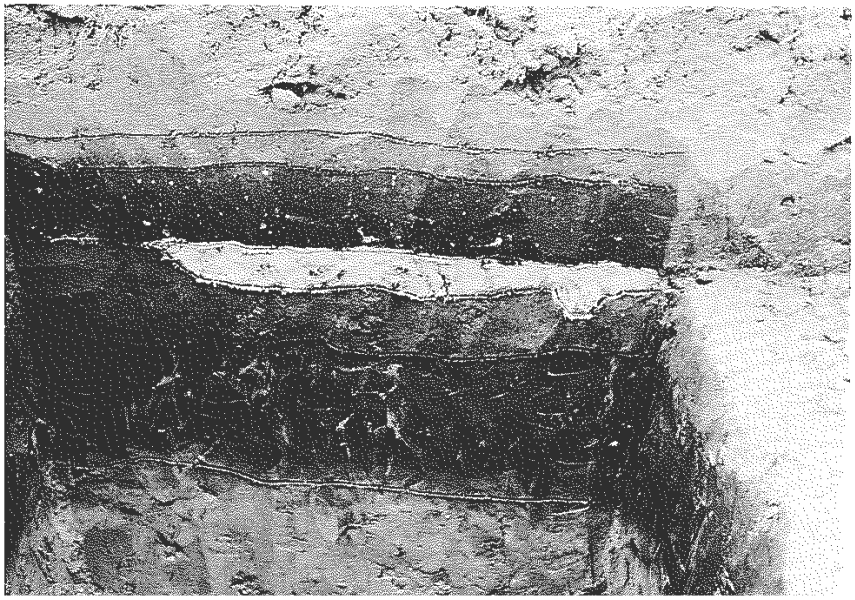
図版　1



1．ＥＮ226 南壁



2．ＦＴ227 南壁

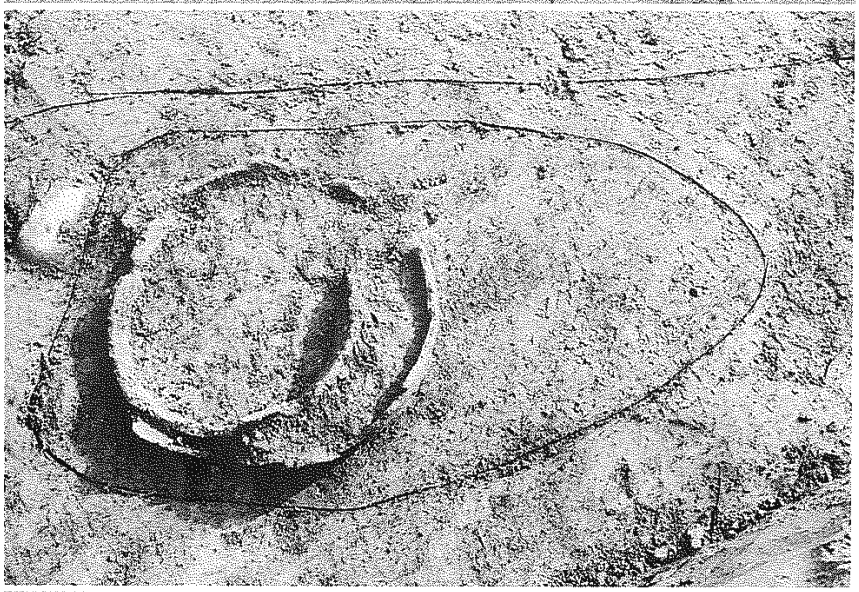


3．ＧＴ240 北壁

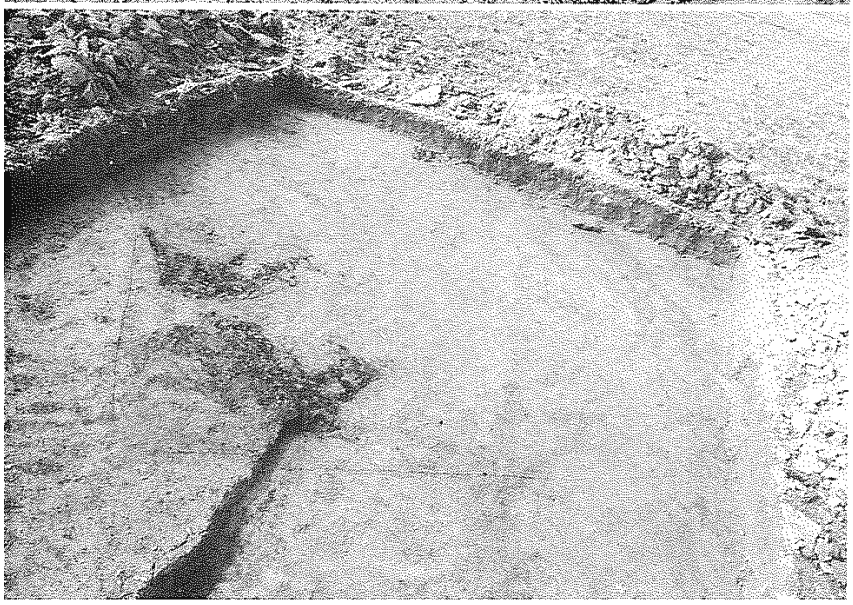
2．ＫＨ207 北壁

図版　3

1．遺物包含層を掘り込んでいるピット（ＥＮ226）



2．土器埋設遺構（ＪＭ348）



3．住居跡（ＩＮ294）

Ⅵ　宇　南　遺　跡

調査要項

遺跡所在地：栗原郡志波姫町八樟字宇南

調 査 期 間：昭和53年6月1日～7月13日、10月2日～14日、
昭和54年2月5日～8日

調査対象面積：約13,000㎡

発 掘 面 積：約3,500㎡

遺 跡 記 号：ＥＵ

遺 跡 番 号：49020

調 査 主 体：宮城県教育委員会

調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：斎藤　吉弘・佐々木安彦
太田　昭夫・小野寺祥一郎

宇南遺跡グリット配置図

１．遺跡の立地

宇南遺跡は、志波姫町役場から西南２㎞に位置する。一迫川の形成した沖積地の中に築館から若柳にかけて標高25m前後のなだらかな台地が東へのびている。本遺跡は、この台地の一部が、八樟付近から北へ舌状に張り出した台地の先端部に立地する。舌状の台地の先端部をみると、西側は一迫川の沖積地で、北・東・南側は標高18～19mの馬蹄形状の湿地で囲まれている。その囲まれた内側の部分は一段高く、平坦地となり標高24～25mの水田と畑である。

２．調査の概要

ほ場整備に係る部分は標高18～19mの湿地に囲まれた範囲である。調査は、水路や道路になる部分、現水田面より削平される平坦な部分の遺構確認、盛土の行なわれる湿地の堀跡の確認を行なった。調査区は、原点Ａと原点Ｂを結ぶ基準線をもうけ、それを基準として全体に３m単位のグリットを組み、グリット名は東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字で表示した。なお東西方向は、60mを単位として大きなブロック（Ａ・Ｂ・Ｃ）とした。

調査は、ほ場整備の水路・道路・削平部分の含まれる水田、畑に３mおきに３m×９mのトレンチを入れ、平坦部南側・平坦部中央・北側斜面の順で進めた。その結果、基本層序は第１層は黒褐色土（10ＹＲ$^{2}/_{3}$シルト）、第２層は黒色土（ＹＲ$^{2}/_{1}$シルト）であった。

平坦部：南側から中央にかけては、わずかに窪んで第２層が堆積しており、土師器・須恵器の散布があった。遺構は地山面で竪穴住居跡10軒、土壙約70基、ピット群などが検出された。

中央部から北側までは地山まで削平を受けていた。遺構は地山面で竪穴住居跡３軒・土壙約20基、方形周溝１基・溝などが検出された。

北斜面では、開田で一部破壊を受けていたが第２層中で縄文土器・石器を発見した。地山面で竪穴住居跡４軒・土壙などが検出された。

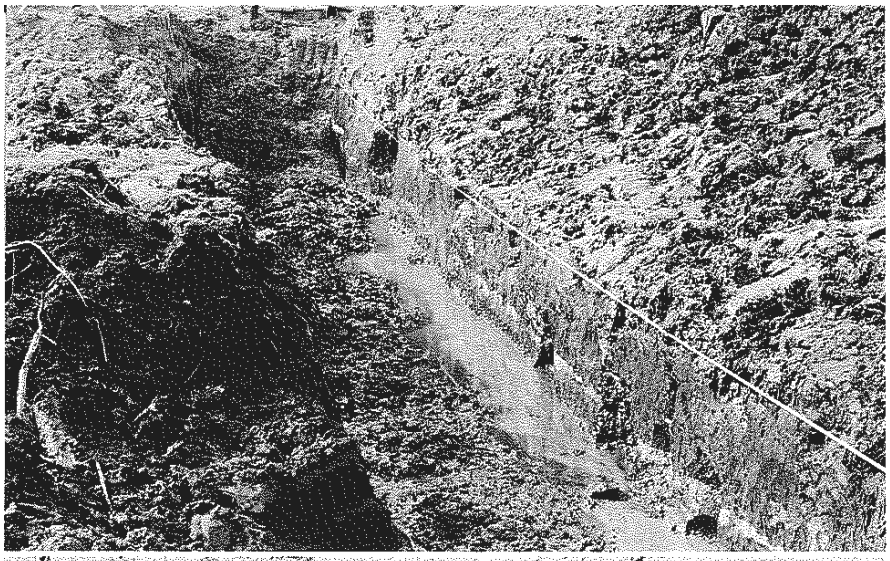
湿地で囲まれた平坦な部分には、このように全体的に遺構が認められることから、確認調査した以外の地区にも遺構の存在が予想される。

湿地の調査：周囲の一段低い湿地は、堀跡と考えられていた。その性格を確認するため２本のトレンチを入れた。その結果、次のような状況であった。

第１トレンチ：東側のせまい地点に、東西方向に24.5×３mのトレンチを入れた。水田面から40～70cmで地山面に達し、上幅23m、深さ30～80cm、底面幅19.5mの落ち込みを確認した。堆積土は４層に大別できた。遺物は須恵器（坏）・土師器（甕）の破片が出土している。

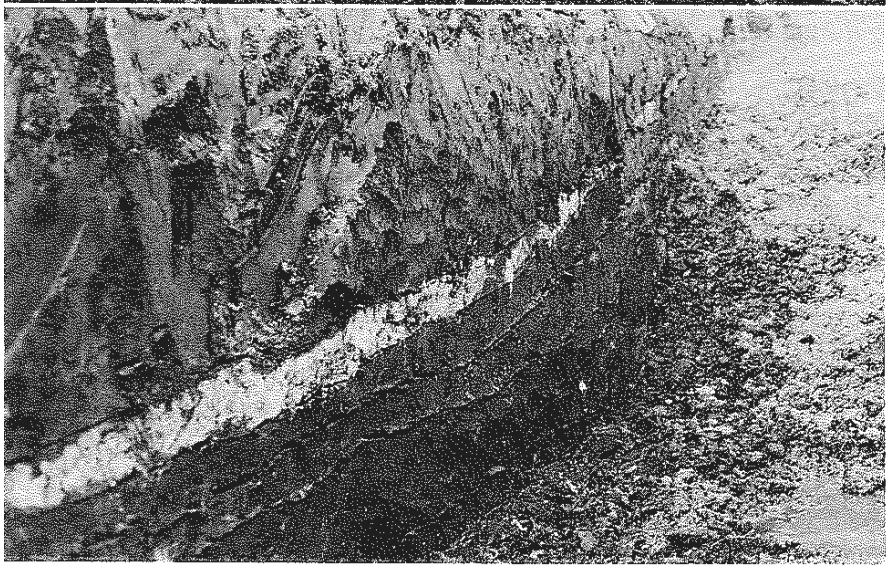
第２トレンチ：北側に南北方向に42×３mのトレンチを入れた。水田面から30～80cmで地山面に達し、上幅20m、深さ60cm～1.5m、底面幅15mの落ち込みを確認した。堆積土は６層に大別できた。遺物は第２層中から中世陶器、第４層中から須恵器の破片が出土している。

第１・第２トレンチの状況からいずれも自然地形をいくぶん改変し利用した可能性がある。



第1トレンチ
（東から）

第1トレンチ
北　壁



第2トレンチ
西　壁

Ⅶ　鶴　ノ　丸　遺　跡

調査要項

遺跡所在地：栗原郡志波姫町八樟字谷地

調 査 期 間：昭和54年2月5日～8日

発 掘 面 積：235㎡

遺 跡 記 号：ＢＫ

遺 跡 番 号：49015

調 査 主 体：宮城県教育委員会

調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：佐々木安彦・太田　昭夫

小野寺祥一郎

１．遺跡の立地

鶴の丸遺跡は志波姫町役場から西南約1.7㎞に位置する。一迫川の形成した沖積地の中に築館から若柳にかけて標高25m前後のなだらかな台地が東へのびている。本遺跡は、この台地の一部が北へ張り出した先端部に立地し、館中央部と水田の比高は約５mである。

２．調査の概要

館をめぐる堀の有無を確認するための調査であり、堀の存在が考えられる平場と一段低くなる水田面との境付近に４本のトレンチを入れた。

第１トレンチ：

下段平場の北西隅に東西方向に9.6m×３mのトレンチを設定した。表土上面より深さ約40cmで地山（緑灰色土・medium Ｓand）に達する。地山はトレンチ東側の端よりしだいに落ち込み始めた。トレンチ東側端より約2.6mのところまで、表土上面から深さ約2.4mまで地山を確認した。その地山の続きは湧水が激しく確認することはできなかった。トレンチ東側の落ち込みは、底面からの立ち上がりと考えられる。

第２トレンチ：

下段平場の北西、第１トレンチの北東約37mに南北方向に15.5m×３mのトレンチを設定した。堀は旧表土を掘り込んでつくられている。南側の旧表土からゆるやかに落ち込み、約２mのところの地山で堀の底面に達する。底面は幅約10mあり、中央部でわずかにくぼみ皿状になる。北側底面端より約0.8mゆるやかに立ち上がり北側の堀上面に達する。これから、堀の幅は約14m、深さ0.7m～1.5mであり、人工的に手を加えていることがわかった。

第３トレンチ：

本館跡の北東方向の水田部分に南北方向に17.5m×３mのトレンチを設定した。北側で水田面下約１mで地山に達し、南側にむかって落ち込み、そこから、約1.2mの深さで底面となる。出土遺物には、須恵器片がある。

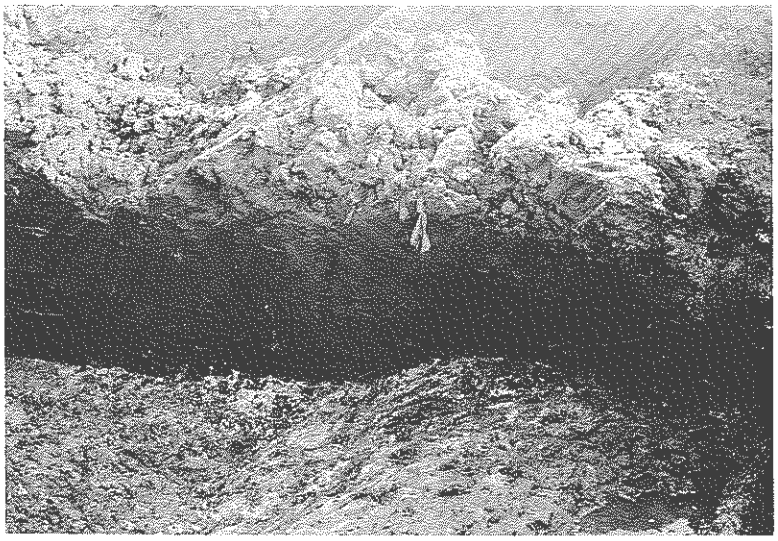
第４トレンチ：

本館跡の南東方向水田部分に東南－北西方向に35.6mのトレンチを設定した。水田面×３m下約0.2m～0.6mで地山（灰黄褐色土・Ｓilt）になる。

３．まとめ

第２トレンチの落ち込みは旧表土を切ってつくった堀である。第１・第３トレンチでは地山の堀状の落ち込みや、立ち上りが検出されたが、人工的に手を加えたとする状況は見られなかった。しかし、第１トレンチ掘は第２トレンチの堀に位置が近いことや、落ち込みの形態が同様であることなどから、第２トレンチに続く堀と思われる。第３トレンチの堀は、第２トレンチの堀に続くものかどうか不明であり、さらにその外側をめぐる堀である可能性がある。

第２トレンチ
（西から）



第２トレンチ
（南から）

宮城県教育庁文化財保護課職員（昭和53年度）

課　　長	氏家　和典	調査第１係係　　長	高橋　多吉	調査第２係係　　長	佐々木茂楨
課長補佐	佐藤　　茂	技術主査	早坂　春一	技術主査	平沢英二郎
〃兼管理第２係長	扇　正　人	技　　師	小井川和夫	技　　師	佐々木安彦
管理第１係　　長	加藤　忠雄	〃	高橋　守克	〃	加藤　道男
主　　事	佐藤　信子	〃	丹羽　　茂	〃	遊佐　五郎
〃	三浦　正義	〃	斎藤　吉弘	〃	森　　貢喜
管理第２係主　査	中田　悌子	〃	千葉　宗久	〃	太田　昭夫
〃	渡辺　正憲	〃	真山　　悟	〃	阿部　　恵
		〃	阿部　博志	〃	手塚　　均
		〃	小野寺祥一郎		
		〃	小川　淳一		
		嘱　　託	熊谷　幹男		